

IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 205, 2026

VIEW 展望

塚田嘉信は日本映画史の研究に何をもたらしたのか／入江 良郎…2

INFORMATION 学会組織活動報告

研究企画委員会…3 機関誌編集委員会…3 映像心理学研究会…4-5
ビデオアート研究会…5-6 アナログメディア研究会…6-11
関西支部夏期映画ゼミナール…12-13 アジア映画研究会…14-15
映像アーカイブ研究会…16 映像人類学研究会…16-17 メディア考古学研究会…17-18
映像玩具の科学研究会…19-21 映像身体論研究会…22-23
東部支部…24-26 中部支部…26-27 関西支部…27-28 西部支部…28
日本映像学会第52回全国大会第二通信…29-30

FROM THE EDITORS

編集後記…30

「Image Arts and Sciences／日本映像学会報第205号」2026年2月1日発行

発行人：黒岩俊哉 編集担当／総務委員会（常石史子・藤井仁子・北市記子）

日本映像学会事務局：176-8525 練馬区旭丘2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内

e-mail：office@jasias.jp <https://jasias.jp/>



日本映像学会

塚田嘉信は日本映画史の研究に何をもたらしたのか

VIEW
展望

入江 良郎

国立映画アーカイブの企画・監修による「映画史家 塚田嘉信：私家版・旧蔵貴重資料復刻大成」（解題・解説：本地陽彦）の刊行が昨年の5月に始まり、現在は全IV期の第I期、全7巻までが配本されたところである（発行：ゆまに書房）。映画史家・塚田嘉信の著作は『日本映画史の研究』を除けば、全てが私家版として発表されたものである。本復刻はこれらに加え、未刊の原稿、さらには彼の研究仲間たちによる同人誌等、いずれも入手困難な資料を集成したものとなっている。

だが、なぜいま塚田嘉信なのか。1995年に塚田が急逝して以来、全貌が謎に包まれていた旧蔵資料が2018年に当館へ寄贈されることになり、それを機に本復刻の刊行も一度に具体化したことは確かだが、その一部については我々と関係者がはるか以前から企画を温めてきたものであり、没後30年が経った現在もその意義は全く薄れることがない。その狙いを一言で言えば、『日本映画発達史』を著した田中純一郎以後の日本映画史の研究を一望することにある。ただし、あらかじめ誤解の無いように言い添えておくと、そこには田中の研究を否定する意図も、塚田の研究のみを最新の成果として参照することを勧める意図も含まれていない。

田中純一郎と塚田嘉信は、映画史研究というコインの裏表のような存在である。前例の無い日本映画史の編纂に着手し、広範なエピソードから成る巨大な通史を完成させた田中と、その記述を再び一から検証し、とくに草創期の映画史を大幅に修正した塚田。初期の関係者を探して取材を行い、多くの証言や資料を掘り起こした田中と、新聞などの記録をくまなく探索し、それらの照合をかつてない精度にまで高めた塚田。研究の成果を淀みの無い自己完結した読み物にまとめる旨とした田中と、自らの著作を素稿とみなすかわりに積極的に研究プロセスを開示し、次世代による再検証を可能にした塚田。このようなスタイルの違いは、田中が多く的一般書籍を刊行し映画史の大家として名を広めたのとは対照的に、塚田の著作が専ら私家版として限定的に配布されたことの理由を説明するものだろう。吉田智恵男は塚田の研究を「映画ジャーナリズムの脚光を浴びることのない地点で、少しづつ進められている」「いわば地下水のようなもの」（塚田嘉信編『映画雑誌創刊号目録 昭和篇』、1965年）と評したのであった。

しかしその一方で、かつては必読の基本書とされた田中の『日本映画発達史』も絶版となって久しいのは、それが今日では多くの修正を要する、時代遅れの書物とみなされていることにもよるだろう。再び誤解を避けるなら、それにより田中の著作が学術的な価値を失ったわけではない。田中だけが明らかにし得たものもあまたに上るからであり、彼の映画史が存在しなければ再び研究が未開のレベルに後戻りすることは明白である。田中への批判は既に塚田により充分に行われている以上、我々のなすべきはそれを繰り返すことではなく、田中の研究の限界と可能性の双方に、能動的に向き合うことだけである。今日の日本映画史研究の基礎を築いた二人の著作が、いずれも新刊では流通していないという現状は残念でならないのだ。

二人に共通しているもの、それは1935年にキネマ旬報社の田中三郎が「映画日本史の確立を提案する」（『キネマ旬報』4月1日号）で唱えた「映画日本史」、すなわち世に多く存在する「映画芸術史」とは異なる「我が国における映画の事業形態なり映画界の事象の年代記ともいふべき、いはゞ形而下的なもつとも常識的な出来事の推移を話る歴史」の解明に生涯を捧げたことであろう。もちろんこれも「映画日本史」を「映

画芸術史」の上位に置くことを意図したのではなく、その必要性さえ認識されていなかった「映画日本史」の確立を切実に訴えたのである（田中純一郎が『日本映画発達史』の原型となる『日本映画史 第一巻』を上梓するのは戦後の1948年である）。こうして同年の9月から開始されるのが、かの「日本映画史素稿」の連載であったが、田中三郎自身も、これを「経済的に支出のみを要して〔中略〕なんら営利的意味を成さない」と判断し、社の出版事業とは切り離して構想した旨を断っている。

このような、いわば歴史の基礎研究を、今後も絶やすずに継承していくことはできるのだろうか。それも田中や塚田と同じレベルの達成が求められるとなれば、想像するだけで目まいがしそうになるが、もう少し肩の力を抜いて、ここではただ、塚田が以後の研究に何をもたらし、何を望んだのかを確認しておきたい。

塚田といえば、何よりも新資料の発掘や、定説とされた映画史を塗り替えた成果の方に注目が集まるのは自然であるが、彼が後続の研究者に残したものはそれだけではない。彼の研究が、調査の過程や資料の出典をそっくり開示しているということは、つまり、彼が調べた資料とともに、調査し得なかった資料が明らかにされていることでもある。それらの境界線が明示されていることは田中の映画史との決定的な違いであり、かつては容易でなかった新聞各紙の閲覧がその後の調査環境の進化とともに可能となれば、再び次の研究への扉が開かれる。そして、その調査は塚田が彼自身に、そして（自身の後には）後代の研究者へと託したものである。

同様に、塚田は常に解明し得た事実だけを記したわけではなく、彼の著作を見れば實際にはかなりの部分が仮説の提示に割かれていることがわかる（ときには仮説に仮説が重ねられることも珍しくない）。これらの仮説をそのまま流用し歴史を上書きしてしまう文献も見られるが（！）、塚田が意図するのはあくまでも将来の資料発掘に向けた論点の整理である。そして新たな資料の出現が、彼の仮説を証明することになるのか、全く異なる結果を導き出すのかはその時になって判明することであるが、つまり素稿であるというのはこのような意味においてであり、塚田の研究は常にこれからの研究へと開かれている。

またこれらと並行して、旧来の日本映画史を再検証し、証明の不十分な記述や、いくつもの未解決の謎が内在していることを指摘したのが塚田の研究であった。以来、今日の研究者は田中の著作はもちろん、過去の研究を繰り返し再読することが求められるようになった。これも、塚田が日本映画史の研究にもたらした大きな転換であろう。

日本映画史の記述を分解し、個々のパートがどのような記録、どのような証言（または伝聞）をもとに書かれたのかを検証すると、実はこれらの裏付けにも強度の違いがあることが判ってくるし、実際には複数存在した異なる証言の一つが選ばれ、他の捨象されているようなケースにも出会うことになる。これらも田中のような記述スタイルでは隠されていたものだ。塚田が我々に見せたのはそのような、日本映画史という定説の外部であり、その先に現れるのは戦前からの「映画日本史」の研究がいまも未完であるという事実である。

それに気づくことと、さらなる境地にたどり着けるかどうかは別の話だが、一人でも多くの若い研究者にとって今回の復刻との出会いがその最初の一歩となることを願う。

（いりえ よしろう／国立映画アーカイブ）

研究企画委員会

中村 聰史

2025年度新規研究会登録(春期・秋期の年2回募集)について、春期(3月募集)、秋期(10月募集)とともに新たな研究会の登録はありませんでしたので、今年度の新規研究会登録は0件になります。

2025年度の研究会活動費助成は、春期(5月募集)に5件の申請があり、これらについて、7月開催の研究企画委員会、理事会にて、一部、希望金額からの減額はありましたが、すべて承認されました。さらに秋期(10月募集)に1件の申請があり、これも12月の研究企画委員会と理事会で承認されました。

次年度も今年度と同じく年2回、新規研究会登録と研究会活動費助成の募集を行う予定です(※ただし、活動費助成は予算の関係で年1回になる場合があります)。事務手続きや委員会、理事会審議の円滑な進行のためにも、応募されるみなさまには、申請期限の厳守をお願い申しあげます。

2025年度は、2年に一度の研究会継続届提出の年度になります。今年度は、研究企画委員会所属の19研究会(支部研究会は除く)のうち、18研究会から、継続届の提出があり、研究企画委員会および理事会での審議を経て、すべて承認されました。残る1研究会、メディアアート研究会からは、廃止届の提出がありました。これも研究企画委員会、理事会で承認され、残念ながら、メディアアート研究会は活動を終えられることになりました。

日本映像学会第52回大会の発表申込期限が迫っております。例年、研究企画委員会では、理事会からの依頼により、発表申込についての予備審査を行います。公正かつ適切な審査実施のためにも、申し込まれる会員のみなさまには申込方法ならびに期限の厳守をお願い申しあげます。

(なかむら さとし／研究企画委員会委員長、日中文化芸術学院)

4. 体裁

(4) 原稿本体には執筆者名は記さない。本文のみならず注や書誌情報も含めて執筆者がわかるような表記は使わない。

改訂案(改正部分下線)：

原稿本体には投稿者名は記さない。本文のみならず注や書誌情報も含めて投稿者がわかるような表記は使わない。投稿者自身の既発表の著作物を引用する場合には、他者の著作物と同様に先行研究として扱い、書誌情報を記す。掲載可となった場合は、修正できる。

○編集体制

青山太郎(名古屋文理大学)、東志保(大阪大学)、岡田秀則(国立映画アーカイブ)、小川順子(中部大学)、川崎公平(北海道大学)、韓燕麗(東京大学)、菅野優香(同志社大学)、木下千花(京都大学、委員長)、倉石信乃(明治大学)、角井誠(早稲田大学、副委員長)、渡邊大輔(跡見学園女子大学)

○『映像学』115号の進捗について

12/19 最終入稿、2/6/2026 校了、2/20 発送(予定)

①投稿論文

9/15 締切：論文17本、研究報告1本

10/20 査読締切

*外部(非学会員)査読者2名(図書研究費10,000円)

12/10 再査読締切

掲載決定：論文3本、研究報告1本

116号へ繰越：論文1本

②書評

担当：角井誠(副委員長)、川崎公平、渡邊大輔

9本(評者の苗字アルファベット順)

長谷正人『ベンヤミンの映画俳優論』(岩波書店、2025年)：海老根剛

渡邊大輔『ジブリの戦後——国民的スタジオの軌跡と想像力』(中央公論新社、2025年)：石田美紀

正清健介『小津映画の音——物音・言葉・音楽——』(名古屋大学出版会、2025年)：伊藤弘了

徐玉『女を見る女のまなざし—日本文芸映画における女同士の絆』(大阪大学出版会、2025年)：久保豊

倉石信乃『孤島論』(インスクリプト、2025年)：久後香純

バリー・キース・グラン特『映画ジャンル論の冒険』(土屋武久訳、晃洋書房、2025年)：仁井田千絵

藤原征生『芥川也寸志とその時代』(国書刊行会、2025年)：柴田康太郎

ジャック・ランシエール『映画の隔たり』堀潤之訳(青土社、2020年)：角井誠

筒井武文『映画のメティエ』欧米編+日本編(森話社、2025年)：常石史子

○委員会の開催

9/20 第1回編集委員会(Zoom)

10/27 第2回編集委員会(Zoom)

12/11-19 第3回編集委員会(メール裏議)

以上

(きのした ちか／機関誌編集委員長、京都大学)

映像心理学研究会

横田 正夫

映像心理学研究会は令和7年9月16日に、共催イベントを実施した。

「周囲 surroundings」について考える

ーフレデリック・ワイズマン『視覚障害』上映会+平井 百香氏講演会『触覚に基づく視覚障害者の知覚と身体運動—インスタントコーヒーを作る動作に着目して—』

《企画概要》

本研究会は、ヒトはどのように「周囲」を知覚しているのかという問いを、視覚障害という主題を通じて、映像学、建築学、生態心理学、身体論等の知見から学際的に探求する試みである。

第一部では、アメリカのドキュメンタリー作家フレデリック・ワイズマンによる1986年の作品『視覚障害(Blind)』を16ミリフィルムで上映する。上映前には、簡単な作家紹介が行われ、作品の歴史的・文化的背景をふまえた鑑賞が可能となる。ドキュメンタリー作家のワイズマン作品は「見ること」そのものを問い合わせ持ち、新たな知覚の可能性を提示する。

第二部では、日本女子大学の平井百香氏による講演会「触覚に基づく視覚障害者の知覚と身体運動—インスタントコーヒーを作る動作に着目して—」を実施し、建築学的な視点に基づき、視覚障害者の知覚と身体運動の特性や、環境デザインが与える影響について実証的研究をふまえてお話しただく。その後のディスカッサントとして、生態心理学・視覚障害心理学を専門とする伊藤精英氏（公立はこだて未来大学）や障害者の雇用実態や支援について研究する渋谷友紀氏（独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構）との対話を通じて、多角的な視点から「周囲を知ること」について議論を深める。

記

- 日 時：2025年9月16日（火）10:30～16:30
- 場 所：日本大学芸術学部 江古田校舎東棟地下 EB-2教室
- 参加費：無料
- 形 式：対面のみ
- 参加申込フォーム：<https://forms.gle/fqxiop2S9AvqFZJD7>
※参加申込み切は2025年9月9日（火）まで
- スケジュール

《第一部》司会：佐藤由紀

- 10:30～フレデリック・ワイズマンとは誰か
- 10:40～13:10 フレデリック・ワイズマン『視覚障害』上映
- 13:10～14:00 休憩

《第二部》司会：青山慶

- 14:00～14:05 オープニング
- 14:05～15:05 講演「触覚に基づく視覚障害者の知覚と身体運動—インスタントコーヒーを作る動作に着目して—」平井百香氏（日本女子大学）
- 15:05～15:15 休憩
- 15:15～15:30 ディスカッサント① 伊藤精英氏（公立はこだて未来大学）
- 15:30～15:45 ディスカッサント② 渋谷友紀氏（独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構）1
- 15:45～16:25 ディスカッション
- 16:25～16:30 クローズ

■ 内 容

● 上映映画

○『視覚障害Blind』1986年/132分/カラー/16mm

○監督：フレデリック・ワイズマン

○撮影：ジョン・ディヴィー

○1984年の秋にアラバマ聾盲学校（AIDB）で行った撮影の結果、一本の映画にまとめる事は不可能だと判断したワイズマンは、約九時間の長編としても成立する四部作として「Deaf and Blind シリーズ」を完成させた。第一部となる本作は、視力をもたない子どもたちの盲学校での日常を、技法的な編集を極力排して丹念に描き出していく（コミュニティシネマセンター）。

○フィルム提供：一般社団法人コミュニティシネマセンター

● 講演会

○「触覚に基づく視覚障害者の知覚と身体運動—インスタントコーヒーを作る動作に着目して—」

○講演者：平井百香（日本女子大学）

○講演要旨 建築の分野において、行為と環境の関係は合わせ鏡のように捉えられてきました。環境の設えは人間の行為を誘発し、人間は行為を行いやすいように環境を変更するとされ、自宅ではこの関係が最も顕著に現れます。視覚障害者の自宅における家具や物の配置、行為中の接触の様子をみると、触覚を基準としたレイアウトのルールが存在していることが分かりました。研究成果から着想を得て、天板にクレーター状の触覚的な手がかりを設け、食器の位置を固定できるようにデザインしたテーブルを開発しました。開発したテーブルと、天板がフラットなテーブルを用いて、視覚障害者が2種類のテーブルでインスタントコーヒーを作る実験を行い、テーブルデザインに応じた動作の特性を比較しました。生態心理学の分野で蓄積されてきた晴眼者のマイクロスリップに関する研究成果を参照しながら、視覚障害者の知覚と身体運動の特性や、環境デザインが与える影響について考察します。

■ 企画者：青山慶（岩手大学）・佐藤由紀（玉川大学）

■ 問合先：[jcss.sig.bsc\(at\)gmail.com](mailto:jcss.sig.bsc(at)gmail.com) ※(at)をアットマークに修正してください。

■ 主 催

●日本生態心理学会

■ 共 催

●日本認知科学会「身体、システム、文化」研究分科会

●日本映像学会 映像心理学研究会

●科学研究費補助金「日常生活行動における「活動切り替え」の生態学的研究」(23K02306)

以上

ワイズマンの作品の上映は18mmのフィルムによる上映で、久しぶりにフィルム上映を見たというのが正直な感想である。作品は視覚障害者が、盲学校で、いかにして日常の行動を身に着けていくかの過程を見せてくれていた。日常の行動であるから広い範囲を含むであろうが、その応用として楽器の演奏があると思われ、作品の初めに障害者の手による楽器演奏の場面が描かれていた。それは広い多くの人が集まる場での演奏であり、誇らしげに彼らが演奏するのが印象的であった。

障害者のドキュメンタリーについて視聴した後で、視覚障害者がコーヒーを

ヴィデオアート研究会

瀧 健太郎

入れるためのテーブルの設計と、そのテーブルを使用した障害者の使い勝手の分析が報告された。こうした分析を行うに先立って、障害の人たちが、日常場面、つまり自宅の空間を、自分が使いやすいようにどのように構造化しているかの調査の報告がなされた。日常場面を使い勝手よくするためには、自身の中にその空間の構造化したイメージができるとうまくいかないらしい。こうした印象を参考に、テーブルの上を構造化するためのテーブルの上に食器を固定できる凹みを作る。その触覚的な手掛けかりで使えるようにするということのようであった。フラットな通常なテーブルに対し、凹みといった手掛けかりが与えられることで、テーブルの上が構造化されるということのようである。

フロアから質問があった。質問者は視覚障害の研究者で、自身の体験を語っていた。それによれば、この場で、いつもと違う座り方をして、ノート類を、体に対していつもと違った側に置いたので、ノートを机から落としそうになったということであった。日常生活の中で、心の中に、決まったマップがあり、そこにいつものように置けば位置がわかるが、そうでないといつもの振る舞いが阻害される。こうしたことは、障害がなくとも、ある程度日常においてみられることであろう。

こうした障害者の研究を、通常の映像表現に応用するとどうなるのであろうか。空間を視聴者が、映像作品から認知する際に、その空間が的確に構造化されていれば、その中の人物やものの配置の理解が容易になるということであろう。イマジナリーラインやモンタージュ、映画的空間といった視覚を基にした技法についてのテーマに、視覚障害者の触覚的な認知的特徴の知見から、触覚的な手掛けかりをもとにした構造化といった側面を媒介として、迫ることができよう。例えばアニメーションで、風が吹いていることを感じさせるのに、髪の毛がなびいている表現がなされるが、その風がどんな風なのか、強い風なのか、柔らかい風なのかといった質まではなかなか表現されない。しかし、質的な表現が行われれば、アニメーションであっても、視聴者の触知覚を媒介にした身体的な感覚が覚醒され、「風の心地よさ」の感覚体験も想起されるのではなかろうか。

(よこた まさお／映像心理学研究会代表、日本大学)



オンライン研究会の様子

第26回「Community of Images アメリカ、フィラデルフィアから日本の戦後映像藝術を振り返る」

日時：2025年12月6日（土）午前10時-12時

オンライン開催

パネリスト：足立アン（CCJコラボラティブ・カタロギング・ジャパン）

進行：瀧健太郎（VCTokyo ビデオアートセンター東京、東海大学芸術学科、東部支部会員）

内容：2024年6月、米フィラデルフィアのArt Allianceほかにおいて、日本のアーティストによる実験的な映像表現と北米とのつながりを探る展覧会「Community of Images: Japanese Moving Image Artists in the US, 1960s-1970s」が開催された。同展では、前衛映画、パフォーマンス、デザイン、拡張映画、個人記録映画、音響、ビデオなど、幅広い実践を取り上げ、当時のさまざまなテーマに焦点が当てられた。

本研究会では、同展の主催団体であるCCJ（コラボラティブ・カタロギング・ジャパン）より足立アン氏を招き、展覧会の企画背景やプロセス、当時の日米の作家たちの交流とその軌跡、ならびにフィルムやビデオの記録保存を中心としたCCJのアーカイブ事業について報告が行われた。

研究会報告：CCJでは、作家の作品について、まず「どこに」「どのような状態で」残されているかを調査することから活動を始め、台帳を作成するカタログ作業を主軸としている。今回の展覧会では、その調査成果の中から、主に日米間の交流の中で制作された作品や、共通するテーマを見出せる作品群が展示された。

また、現存する作品がないものや素材が欠損しているケースについては、復元や修復が試みられた。例えば、飯村隆彦とアルヴィン・ルシエによる共同制作《Shelter 9999》（1967）や、1970年の大阪万博で使用されたとされる中嶋興の特殊映写装置《リキッド・プロジェクター》（1969）などは、失われた素材や機材を当時の図面や写真を手がかりに復元し、数十年ぶりに公開されることとなった。

このように同展は、日米間の関係性の中で発見された作品を「保存すべき優先順位」という観点から構想されたものであり、一般的に理論やテーマを先行させて構成される展覧会とは異なる性格を持つことが紹介された。参加者からの質問に対し足立氏は、CCJのメンバーには実験映画研究を背景に持つ者とビデオアートを専門とする者がいるため、両者のバランスが取れた展示構成が可能であったこと、また保存や展示の可否は記録媒体に

アナログメディア研究会

太田曜

よって条件が異なることを説明した。例えば、フィルム作品は本来複製が望ましいものの予算的制約がある一方、ビデオ作品はデジタル化によって比較的展示しやすいなど、媒体ごとの違いがあることが述べられた。

さらに、展覧会の受け止めや日本の実験映像がどのように評価されたかという問い合わせに対し、足立氏は、雑誌や日系メディアからの反響があったこと、社会運動やフェミニズムといった視点から1960～70年代の作品を一堂に会して紹介した点が、一般的な観客にも理解しやすい切り口として高く評価されたと述べた。一方で、研究的な視点からは、さらに掘り下げた見せ方も可能であったかもしれない振り返りつつ、アメリカと日本の関係性を可視化できた意義を指摘した。

なお、本展は開催直前にメイン会場となる予定であったフィラデルフィアのUniversity of the Artsが閉鎖されるという予期せぬ事態に見舞われたが、周囲の協力により、無事に約一か月間の開催を実現したという。研究会では、こうした展覧会を取り巻く社会情勢や文化的環境についても言及され、非常に有意義な研究会となった。

パネリスト経歴：足立アン

コラボラティヴ・カタロギング・ジャパン エグゼクティブ・ディレクター。同団体は、組織や個人が所蔵する日本の実験的映像作品を対象に、アーカイブ構築やメディア保存の支援を行っている。ニューヨーク近代美術館(MoMA)では、同館のグローバル研究イニシアチブであるC-MAP(Contemporary and Modern Art Perspectives)のプロジェクトを担当し、デジタルプラットフォーム「post(post.at.moma.org)」の立ち上げに貢献した。2009年には、ビデオアートのアーカイブおよび配給組織であるElectronic Arts Intermixにて、日本の実験映像作品の巡回上映および出版企画「Vital Signals」を手がけ、ディストリビューション・コーディネーターを務めた。これまでに、東京国立近代美術館、テート・モダン(ロンドン)、慶應義塾大学アートセンター(東京)、Archives of American Art(ワシントンD.C.)などで展示企画や講演、執筆を行い、昨年はフィラデルフィアにて本報告で紹介した「Community of Images: Japanese Moving Image Artists in the US, 1960s-1970s」を開催している。

同展の記録はサイトで詳細な記録を見ることができる。

<https://www.collabjapan.org/documentation-community-of-images-japanese-moving-image-artists-in-the-us-1960s1970s>



(たき けんたろう／ビデオアート研究会代表、
特定非営利活動法人ビデオアートセンター東京、東海大学)

【活動報告 2025年4月～11月】

以下の上映会等の活動を行なった。協力企画となっているもの以外は研究会主催企画。研究会主催4件、研究会協力2件。

- 4月20日 実験映画を観る会 VOL.13 IKIF特集上映
“光の遊戯：素材と技法のアニメーション実験工房”
- 6月22日 実験映画を観る会 VOL.14
渡辺哲也と1970年代の実験映画“再撮影映画は映画の構造を検証する”
- 7月26日・27日 (研究会協力企画)実験映画上映 太田曜作品特集
- 9月21日 実験映画を観る会 VOL.15 栗原みえ 8ミリ映画特集
唯一無二の美しさ、raison d'être (レゾンデール 存在意義)と映画
- 10月26日 実験映画を観る会VOL.16
原田一平回顧上映会“家族を再撮影する映像詩人”
- 11月1日・2日 (研究会協力企画)はらっぱ祭り フィルム映像インスタレーション

■実験映画を観る会VOL.13 4月20日

IKIF特集上映 “光の遊戯：素材と技法のアニメーション実験工房”



【経緯】

〈イメージフォーラム・フェスティバル2024〉では、IKIF(木船徳光+木船園子)の特集プログラム「アニメーション実験工房: IKIF特集」が組まれていた。この特集では、16ミリ作品は16ミリフィルムで上映したが、8ミリ作品はデジタル上映だった。上映後に、8ミリ作品と16ミリ作品とともにフィルムで上映する上映会をやらないかともちかけて実現したのが今回の上映会である。フェスティバルでは上映できなかった作品があるというので、それも追加した。特筆すべきは、二面スクリーンで上映する8ミリフィルム作品『回転AB』を、2台の映写機で上映したことである。フィルムでの上映は、30年ぶりのことだった。

【案内文】

IKIF(石田木船イメージ・ファクトリー)は、東京造形大学の学生だった石田園子と木船徳光が1979年に結成したユニットである。初期の頃は主に、アニメーションの自主グループ「アニメーション80」で活動した。さまざまな素材と多様な技法による実験的なアニメーションに特徴があり、立体作品やパフォーマンスなど発表形態もさまざまである。また早くからコンピュータグラフィックスに着手し、さまざまな作品の3DCGを手がける。昨年のイメージフォーラム・フェスティバルでも特集が組まれたが、今回の特集ではより多くの作品が含まれており、すべてがフィルムによる上映となる。二面スクリーンの『回転AB』も二台の映写機で上映する。

【プロフィール】

IKIF アイケイアイエフ(木船徳光+木船[石田]園子)

1979年結成。8mm、16mmフィルムによるアニメーション制作を開始する。様々な素材や技法を用いた実験アニメーションや映像インスタレーション等の制作、発表を続ける。1990年以降CGアニメーション制作に携わり(株)IKIF+を設立。2001年から東京造形大学、東京工芸大学でアニメーション教育に携わる。2004年3月定年退職。



【上映作品】

『ZOO II』 8ミリ / 4分 / 1980年

『M氏の3333』 8ミリ / 3分 / 1980年

『CIRCLE』 8ミリ / 4分 / 1981年

『FACE』 8ミリ / 3分 / 1981年

『走馬灯(一)』 8ミリ / 3分 / 1982年

『転化(1)』 8ミリ / 3分 / 1983年

『アニメーション百科1980-83』 8ミリ / 5分 / 1980-83年

『SCRIBBLE BOARD砂鉄3』 8ミリ / 2分 / 1986年

『回転AB』 8ミリ二面映写 / 2分 / 1983年

『乱PART2 RADIANCE』 16ミリ / 9分 / 1982年

『石化(一)』 16ミリ / 6分 / 1982年

『カメラオブスクラ3』 16ミリ / 3分 / 1984年

『DIM』 16ミリ / 4分 / 1984年

『(二)海の底/At the bottom of the sea』 16ミリ / 3分 / 1985年

『阿耳曼陀羅(二)』 16ミリ / 5分 / 1986年

『流砂/QUICK-SAND』 16ミリ / 6分 / 1987年

『SIGN』 16ミリ / 4分 / 1990年

『スクリーン・トーン・ミュージック』 16ミリ / 5分 / 1992年

【スケジュール】

日時：2025年4月20日（日曜日） 14時から上映

場所：小金井市中町天神前集会所

参加資料代：1000円

13:45 開場

14:00~16:30 上映、解説

16:30~16:45 休憩

16:45 トーク&質疑応答（聞き手：西村智弘）

17:30 終了

【主催】

主催：日本映像学会 アナログメディア研究会

<https://www.facebook.com/analogmedia>

<https://twitter.com/analogmedia>

8ミリフィルム小金井街道プロジェクト

<http://shink-tank.cocolog-nifty.com/perforation/>

<https://twitter.com/8mmfkpp>

(西村 智弘)

■実験映画を観る会Vol.14 6月22日

渡辺哲也と1970年代の実験映画“再撮影映画は映画の構造を検証する”



【経緯】

「アナログメディア研究会」では、以前に渡辺哲也のフィルム作品を調査したことがある。このたび遺族の意向で渡辺哲也のフィルム作品を国立映画アーカイブに寄贈することになり、寄贈の前にフィルムの上映をおこなうことを提案して実現した。渡辺哲也には再撮影した作品が多いが、これは1970年代の実験映画の特徴でもある。上映会では、渡辺哲也のフィルム作品だけでなく、再撮影の技法を使った他の作品と合わせて1970年代の実験映画の特集にした。

【案内文】

渡辺哲也は、1970年代に活動した美術家・映像作家である。この時期は現代美術で映像をつくることが流行し、渡辺もそうした作家の一人だったが、映像を本職とした点が他の美術家と異なっていた。1970年代の実験映画では、写真やフィルムをコマ撮りすることが流行しており、渡辺の映画も再撮影に特徴づけられる。映像によって映像を撮影するメタ的な視点が、映画の構造を検証したのである。今回の特集では、渡辺哲也の実験映画と再撮影による同時代の実験映画を上映することで、1970年代の実験映画をめぐる状況を振り返ってみたい。

【プロフィール】

1947年、岐阜県に生まれる。1966年、東京造形大学絵画専攻に第一期生として入学。入学後は、学生運動に熱心に取り組んでいた。卒業後は松本俊夫の助監督を務め、主にテレビコマーシャルの制作に携わる。1972年、美共闘REVOLUTIONの第二次美術史評社に参加。美術家としてコンセプチュアルな作品を手がけながら、その延長で実験映画やビデオアートを制作した。1975年の〈パリ青年ビエンナーレ〉ではフィルム部門に出品している。1970年代末には美術家としての活動を休止し、その後は、自然をテーマにしたテレビ番組や展示映像の制作に携わる。2007年死去。

【上映作品】

渡辺哲也『エマルジョン・シー』1972年、11分

渡辺哲也『ウォール・シー』1972 - 1973年、12分

渡辺哲也『クロッシング』1974年、3分

渡辺哲也『コーヒーを飲む』1975年、15分
 奥山順市『LE CINÉMA 映画』1975年、5分
 奥山順市『映画の原点 original of motion picture』1978年、4分
 居田伊佐雄『オランダ人の写真』1976年、7分
 居田伊佐雄『プレバラート』1977年、12分
 濑尾俊三『フィルム・ディスプレイ』1979年、6分
 (すべて16mmフィルム)

【スケジュール】

日時：2025年6月20日（日曜日） 14時から上映

場所：小金井市中町天神前集会所

参加料金：1000円

13:45 開場

14:00-16:30 上映、解説

16:30-16:45 休憩

16:45 トーク&質疑応答「1970年代の実験映画」（西村智弘）

17:30 終了

【主催】

日本映像学会 アナログメディア研究会、8ミリフィルム小金井街道プロジェクト

（西村智弘）

■（研究会協力企画）実験映画上映 太田曜作品特集7月26日・27日



【経緯など】

札幌映像機材博物館は館長山本敏氏の私的努力で維持されている映像機材の博物館。札幌で新しく開館するについてはクラウドファンディングの関係もありFACE BOOK上では館長山本氏とはやり取りがあった。小田原ビエンナーレでの太田曜作品上映の写真をFACE BOOKにあげたところ、うちでも上映しないかとお誘い頂いた。全てフィルムの作品をフィルムで上映していたのでお誘いくださったのではないかと思われる。

上映は全てフィルム、しかも二日間でプログラムを違うものにするということになり、全部で26本、3時間以上、リールと共に重さ20kgを手で持つて運ぶことになった。上映会の札幌映像機材博物館は8ミリ、16ミリ、35ミリなどの機材が所狭しと展示され、しかもそれら全てがちゃんと動く、使える状態という、世界でもまれな博物館だ。上映はそういう訳で何の不安も無く、機材に精通する山本館長とは技術的なやりとりも実にスムーズに行われた。

研究会メンバーで札幌在住の伊藤隆介氏、大島慶太郎氏とそれぞれ対談もできた。おいでくださったお客様は東京で実験映画を上映するのとは違い“いいわゆるその筋の方”ではない方々で、上映後の懇親会でも興味深いお話を伺うことができ大変有意義であった。



【案内文など】

太田曜 実験映画作品上映

2025年7月26日土曜日 27日日曜日

14時から上映（13時30分開場）18時終了

“美術”と“場所”と“実験映画”

札幌映像機材博物館

<https://binnmuseum.web.fc2.com/>

札幌市白石区平和通2丁目南1-6（旧:カメラ懐館）

映画フィルムにこだわり、現在もフィルムでの制作を続ける実験映画作家、太田曜の作品上映。札幌、北海道では初の個展上映です。全てフィルム作品、上映もフィルムで行います。トークも行います。土曜日は映像作家、美術家、北海道教育大の伊藤隆介氏、日曜日は映像作家、北海道情報大学の大島慶太郎氏。

太田曜

: <http://www.tokyo100.com/ota/>

: <https://www.facebook.com/yo.ota.18/>

入場料金代：

一日 1000円 二日 1500円 プラスコーヒー500円

上映プログラム：

上映作品リスト 2025年7月26日 土曜日

“美術（家）とのコラボレーション” 12作品 88分

●STÄDEL 16ミリ カラー サイレント 7分1986年

●5400Secondes 16ミリ カラー サイレント 10分1987年

●INSTALLATION TIME 16ミリ カラー サウンド 6分1993年

●ENTOMOLOGIST 16ミリ カラー サウンド／サイレント 8分1996年

●INCLINED HORIZON カラー サウンド 8分2007年

●REFLEX/REFLECTION カラー サウンド 8分2009年

●FANTÔME カラー サウンド 8分2011年

●根府川(Nebukawa) パート・カラー サウンド 6分2012年

●ULTRAMARINE カラー サウンド 5分2014年

●『The Militia Company of Captain Frans Banning Cocq』2015 カラー サウンド 5分

●Le Mur (ル・ミュール 壁の意味のフランス語) 2017 / 16 mm (撮影はスーパー16mmカメラ) モノクロ 光学サウンド+別出し / 7分

原案：タタラタラ 音楽：村井隆文

★改造16ミリフィルム映写機で映写、上映

- 『ブライドピーク(Bride Peak) チョゴリザ 花嫁の峰』2021年8mm
(24コマ/秒) 10分音声別だし
波多野哲朗先生撮影の8ミリフィルムに基づいて作成された“ファウンド・フッテージ”作品

上映後に美術家、映像作家、北海道教育大学教授の伊藤隆介氏とトーク

上映作品リスト 2025年7月27日 日曜日

“場所に関わる作品” 14作品 97分

- UN RELATIF HORAIRE 16ミリ カラー サイレント 2分1980年
- UNE SUCCESSION INTERMITTENTE 16ミリ カラー サイレント 2分1980年
- UN RELATIF HORAIRE No3 16ミリ カラー サイレント 3分1980年
- FLOTTE 16ミリ カラー サウンド／サイレント 9分1994年
- DISTORTED "TELE" VISION カラー サウンド 11分1998年
- INCORRECT CONTINUITY カラー サウンド 9分2000年
- INCORRECT INTERMITTENCE カラー サウンド 6分2001年
- SPEED TRAP カラー サウンド 6分2004年
- ANTONYM of CONCORD(E) カラー サウンド 9分2005年
- SURF/LENGHT カラー サウンド 8分2010年
- L'Image de la Pucelle 2 カラー サウンド 12分2013年
- 『BLANK SPACE』2016年制作16mm スーパー16mmフォーマット 光学録音 (一部音声別だし) 8分
- ★改造16ミリフィルム映写機で映写、上映
- 『Les Grands Boulevards』2019 カラー サウンド6分16mm スーパー16mmフォーマット & ノーマル16mmフォーマット光学録音 (一部音声別だし) 8分
- ★改造16ミリフィルム映写機で映写、上映
- 『OPTICAL SOUND FILM』2024年制作16mm スーパー16mmフォーマット & ノーマル16mmフォーマット光学録音 (一部音声別だし) 8分
- ★改造16ミリフィルム映写機で映写、上映

上映後に映像作家、北海道情報大学准教授の大島慶太郎氏とトーク



主催：札幌映像機材博物館

<https://binmuseum.web.fc2.com/>

協力：日本映像学会アナログメディア研究会

<https://www.facebook.com/analogmedia>

(太田 曜)

- 実験映画を観る会 VOL.15 9月21日栗原みえ 8ミリ映画特集
唯一無二の美しさ、raison d'être (レゾンデートル 存在意義)と映画



【経緯】

イメージフォーラムフェスティバルで大賞受賞など評価の高い栗原みえ作品の、特に8ミリ上映をしようという話は前々からあったが、作家のスケジュールがなかなか調整出来ずにのびのびになっていた。9月21日なら可能ということで急遽上映される事となった。栗原みえの8ミリフィルム作品の特徴は、膨大な尺の撮影と綿密な編集で、一見何気ないように見えるカットのそれぞれに全く隙が無い点だ。8ミリフィルムの販売終了や現像所の閉鎖でその後はデジタルで作品制作を続けている。上映会では初期のものを中心に8ミリフィルムで制作された作品をフィルム映写機で上映した。8ミリフィルム映画はやはりフィルム上映でなければその真価は味わえない。

【案内文】

実験映画を観る会ではこれまで14回フィルムで制作された実験映画をフィルム映写機で上映してきた。15回目は栗原みえ特集上映、8ミリフィルム映画作品だ。イメージフォーラム映像研究所時代に制作された『Ⅱ小曲』から2011年の『小曲』まで7作品。個人で制作する作家ではしばしば映画作りはレゾンデートルと深く関わっている。栗原みえ作品は確かな撮影技術と、巧みな編集で、それが詩情豊かな映画に昇華している。栗原映画が多くの方に感動を与えるのは、冷静に美しさが追求され、映画として完成されているからだ。8ミリフィルムの能力の極限ともいえる栗原みえ映画を、フィルム上映で鑑賞してほしい。

【スケジュール】

日時：2025年9月21日(日曜日) 15時30分から上映

場所：小金井市中町天神前集会所

参加料代：1000円

【上映作品】※すべて8ミリフィルム上映

- 『Ⅱ小曲』1993/3分20秒/Super8/silent/18コマ
- 『冬凧』1994/17分/single-8/silent/18コマ
- 『空気息子』1995/25分/single-8/silent/18コマ
- 『青の数値』1999/14分/Super8/sound/マグネ/モノラル/18コマ
- 『無音の領域』2006/13分/Super8/sound/マグネ/モノラル/18コマ
- 『夏草2/10』2008/10分/single-8/silent/18コマ
- 『小曲』2011/5分/Super8/silent/18コマ

【スケジュール】

15時15分 開場

15時30分～18時00分 上映

18時15分～18時45分 トーク(ヤジマチ サト土)

18時45分～19時15分 質疑応答



【プロフィール】

栗原みえ

1971年生まれ。短大卒業後、録音スタジオの映写技師を1年勤めたのを機に映画を仕事にしないことを決意。その後イメージフォーラム映像研究所第17期入所。これまでに8ミリフィルム作品を9作品、デジタル作品を2作品発表している。

ヤジマチサト土

1958年 東京都府中市生まれ。イメージフォーラム映像研究所卒。歯科臨床医師。

主に目に見える作品や表現行為を通して、目に見えない真理に少しでも触れたいと、作品鑑賞や制作をしている。好きな表現のひとつが映像作品で、特にフィルムをすり抜けてくる光には特別な何かを感じてならない。直感的に大枠を捉え、後に細部の理由を探るという思考の癖があり、作品鑑賞も制作もその感覚でやっていた気がする。

フィルムアーカイブ団体「むさし府中アルキヴィオ」所属

【主催】

日本映像学会 アナログメディア研究会

8ミリフィルム小金井街道プロジェクト

(太田 曜)

■実験映画を観る会VOL.16 10月26日

原田一平回顧上映会“家族を再撮影する映像詩人”



【案内文】

原田一平といえば、家族にカメラを向けた映画で知られている。しかも、家族が写った写真やフィルムを再撮影することに特徴があった。たとえば代表作の『連続四辺形』は、かつて父親が撮影した幼き日の原田のフィルムと、現在の原田が息子を撮影したフィルムを重ね合わせた作品だった。原田の映画は、きわめてプライベートでパーソナルな側面をもつ一方、カメラの技巧を駆使した高度な技巧性をもつという、ある意味で対極的な特徴が両立していた。2020年に60歳で亡くなった原田の、はじめてのまとまった回顧上映である。16ミリの作品で原田を振り返ってみたい。

【略歴】

1960年東京生まれ。1987年、第10期イメージフォーラム付属映像研究所卒業。『連続四辺形』が「イメージフォーラム・フェスティバル1987」の一般公募で入選。実験映画のほかに、企業PR、ミュージックビデオ、美術記録、Webコンテンツなどを制作。2020年死去。

小学校3年の時、「これから一生、日記のように毎日、詩を書く事。」という宿題がだされて以来、生涯にわたり映像で詩を書き続けた。小学校6年の時、それが一生ではなく一週間の間違いだと気付く。第1作『連続四辺形』(1984)を見たオランダの映像キュレーター、ニコ・バーべは「映像表現が到達した今の最高地点」と言い、フランスの映画監督レオス・カラックスは「きわめて美しいフィルム、白黒のイメージは素晴らしい、溢んでみたいところさえある。」と語ったなど海外で高い評価を受けた。(映像作家 原田一平 オフィシャルサイト [digifilm.tv < harada ippei] より)

【上映作品】

『連続四辺形』1987年、16ミリ(オリジナル8ミリ)、13分

『食卓の小さな扉』1988年、16ミリ、6分

『8m/m家族』1988年、16ミリ、6分

『武藏野少年伝説』1990年、16ミリ、14分

『渚』1989年、16ミリ、25分

『RAW WHITE』1991年、16ミリ、13分

『こもれび』1992年、16ミリ、12分

【スケジュール】

日時：2025年10月26日(日曜日) 14時から上映

場所：小金井市中町天神前集会所

参加資料代：1000円

13:45 開場

14:00-16:30 上映、解説

16:30-16:45 休憩

16:45 対談&質疑応答「原田一平の思い出」(宮原芽映×西村智弘)

17:30 終了予定

【主催】

日本映像学会 アナログメディア研究会

8ミリフィルム小金井街道プロジェクト

協力：宮原芽映、深田独

(西村 智弘)

【経緯】

原田一平のフィルム作品を国立映画アーカイブに寄贈する話が進んでおり、寄贈の前に上映をおこなわないかという話で実現した。原田が死去したのが2020年で、その後まとまった上映会をおこなっていなかったため、原田の友人、教え子などが集まり、盛況であった。

- (研究会協力企画) 11月1日・2日 はらっぱ祭り フィルム映像インスタレーション



武藏野はらっぱ祭り <https://the-harappa.net/>

【経緯】

毎年都立武蔵野公園で行われる『武蔵野はらっぱ祭り』でアナログメディア研究会は8ミリフィルム小金井街道プロジェクトと共同でフィルムを使った映像インсталレーションとそのためのワークショップを行ってきた。今回は映像インсталレーションで祭りに参加する方法を改め、事前のワークショップをやめ、自前の機材、フィルムで参加出来る人で行う事となった。先々の参加方法の可能性を模索する試みでもあった。8ミリフィルムなどフィルムで映像を制作するのに機材の入手やフィルムの入手、現像などで一昔前とは全く状況が異なっている。機材はもう随分前から基本的に中古しか無いがその価格が高騰している。フィルムも8ミリフィルムが一本(コダック エクタクローム100D)7,480円、現像は都内唯一の現像所レトロ通販で3,800円、合計10,000円以上だ。今では8ミリフィルムは庶民、貧民のメディアではない。そういう中で、フィルムを古いメディアではなく新しいメディアだと考えて、表現に使う人たちがいる。今回も以前に比較すると参加の敷居が高くなっているのにも関わらず初めて参加した人もいた。そもそも参加方法の変更にはこれまでワークショップなどを中心的に行ってきた研究会の太田が徐々に若手にその役割を移行していきたい、というのがあった。ワークショップをやめたのはそうした事情によるが、次回は復活させてはどうかという意見も出ているので、役割の移行は順調に進むのでは無いかと楽観している。

武蔵野はらっぱ祭りでのフィルム映像インсталレーション自体は一般に広く公開され、今回多くの鑑賞者が訪れ、鑑賞し、好評だった。デジタル技術で世界中でプロジェクトマッピングが氾濫しているが、このような主に8ミリフィルムを使った野外映像インсталレーションは世界的にも珍しい。やり続けていたり歴史や、参加者の多いことでは世界に自慢できる催しだ。野外でのフィルム映像インсталレーションでは天気が何より懸念される条件だが、今年は一滴の雨にも降られず無事終了した。

【案内文】

都立武蔵野公園で行われるはらっぱ祭りで8ミリフィルムなど主にフィルムを用いた映像インсталレーションを展示します。フィルムによる作品を林の中でライブで観賞していただきます。短尺の実験的な映像作品を、フィルム映写機で自由なスクリーンにプロジェクションします。上映するのは作家自身。10組の作家の参加を予定しています。武蔵野公園の暗闇にきらめくフィルムの喧騒をお楽しみください。

はらっぱ祭りは市民がつくりあげるお祭りで、屋台、ライブ、フリマ、展示など様々な催し物が行われます。お祭り自体は雨天決行ですが、映像インсталレーションは雨天中止の予定です。入場無料ですので、お気軽にお越しください。

【スケジュール】

11月1日(土) 10:00~20:00

11月2日(日) 10:00~20:00

※映像インсталレーションは両日とも日暮れから20時頃まで。



場所：都立武蔵野公園 くじら山周辺

<https://share.google/YP8ekiJyW0DT3dMVz>

※映像インсталレーションは裏手の林の中で実施。

主催 8mmFILM小金井街道プロジェクト

協力 日本映像学会 アナログメディア研究会

(太田 曜)

(おおた よう／アナログメディア研究会)

関西支部夏期映画ゼミナール

大橋 勝

2025年9月5日（金）から9月7日（日）の三日間、日本映像学会関西支部第45回夏期映画ゼミナールが開催された。テーマは「こども映画特集—子供向け映画、映画の中の子供たちー」とし、8本の映画作品の上映と、上映後のトーク＆ディスカッションを行なった。以前は最終日に2時間程度の時間を設けてパネル・ディスカッションを行なっていたが、一昨年より各作品上映後のトーク＆ディスカッションというスタイルを導入した。これは映画を見た直後に、その印象が鮮やかなるうちに作品について語り合う場を作るという意図で、スピーカー側にも観客にも手応えがあったため、今年度もこの形式を踏襲した。

今年度のテーマは「こども映画」。我々はかつて皆“こども”であり、映画制作・研究者・愛好家の多くが子供時代から映画に触れ、その後の嗜好や考え方、生き方にすら何らかの影響を受けたのではないだろうか。このような仮定から、子供向けコンテンツとして製作された映画に焦点を当て上映作を選定した。同時に「こども映画」という語には、子供が主役もしくは物語上重要な役割を担う映画も含まれることを踏まえて作品を加えた。子供の視点は単に純粋・無垢というだけでなく、常識や倫理から逸脱することがあり、大人の世界（社会）の価値観に亀裂を与えることがあるだろう。以下個々の上映作品とトークに触れていく。

『煙突屋ペロー』（田中喜次監督、1930年、童映社）

モノクロ、影絵アニメーション作品でもともとサイレント映画であったが、今回上映されたのは復元版（1987年）フィルムで、『まんが日本昔話』で馴染みの常田富士男のナレーションで物語が展開する。これは平和への願いを訴える内容で、子供向けの啓蒙的・教育的狙いで制作されているが、プロキノでも上映された経緯のある作品である。トークは王星月（大阪芸術大学大学院芸術制作研究科）で、自らも学生で制作・研究を行っている立場から、アマチュア制作集団（同志社大学の学生）であった童映社のメンバーが、手探りでアニメーション映画を制作したことについて語った。また中国の「剪紙」アニメーションや伝統芸能「皮影劇」との比較が行われた。また、剪紙（中国の切り絵細工）がロッテ・ライニガー（ドイツのアニメーション作家）の影絵アニメーションのリソースとなり、ライニガーを参考・目標としたのが本作であるという文化・クリエイティブの継承があることが司会（大橋）により指摘された。

『新諸国物語笛吹童子』三部作（萩原遼監督、1954年、東映）

前年（1953年）に放送され大人気を博した連続ラジオドラマの映画化。いずれも1時間未満の中編で、二本立て興行の添え物的扱いであったが、少年ファンの大きな支持を得て大ヒットとなったシリーズである。今見ると素朴な味わいの特撮を駆使した時代劇で、荒唐無稽の内容や、超の付くご都合主義の展開は、逆に新鮮な驚きを現代の私たちにも与えてくれた。トークの倉田修二（撮影監督）は自らの業界キャリアを披露しつつ、本作で用いられている撮影技術の特徴について、現場の人間ならではの視点で語ってくれた。なぜか皆が口ずさむことのできる『笛吹童子』の主題歌についてなど、司会の石塚氏と軽妙なやり取りで会場を温めた。

『風の中の子供』（清水宏監督、1937年、松竹大船）

児童文学の坪田譲治の小説を原作に、子供を撮ることでは定評のあった清水宏監督による映画化。遊びを中心とした子供達の世界が生き生きと映しながら、そこにも影を落とす大人たちの事情が、主人公の少年の視点から描かれており、幅広い観客層から支持を受けた映画である。トークの葉口英子（ノートルダム清心女子大学、日本映像学会会員）は、専門の児童文化研究の立場から、原作者の坪田が原作小説を新聞連載はじめた事情、映画化するにあたっての思い（連載時に映画化の企画が持ち上がる）、清水監

督との意見交換などを、当時の資料をもとに説明した。その上で映画表現とも重なる、近代文学における「子ども」へのまなざしが語られた。

『白蛇伝』（藪下泰司監督、1958年、東映動画）

東映動画（現東映アニメーション）初、そして日本初の劇場用長編カラー・アニメーション作品。中国の古典説話をもとに大人でも楽しめる物語に仕上げられているが、基本的には子供の観客を意識した作りになっている。今回、複数の観客や話者が指摘したのは、上映プリントの状態の良さがあった。聞けば京都文化博物館にフィルムを収蔵する際に、新たにプリントしたもの納入したとのことであった。トークの金澤洪充（アニメーション演出家）は、本作が制作された頃の東映動画の状況や、国際的マーケットを視野に入れ、ディズニーに追いつけ追い越せと製作に臨んだ姿勢などを紹介した。更に現在の商業アニメーションとは異なる、あるいは淘汰されて消滅した本作の特徴について説明があった。一例を挙げると、カメラの視点が固定的で、観客席から舞台を見るような構図が多いこと。上手下手の関係でストーリーの力学が回っていることなど現役のアニメーション演出家ならではの視点から指摘があった。

『ノンちゃん雲に乗る』（倉田文人、1955年、芸研プロ・新東宝）

石井桃子の同名児童小説の映画化。少女を主人公とし、ファンタジー的要素を盛り込んだ子供向け映画である。トークの中村聰史（日中文化芸術学院、日本映像学会会員）は、一見微笑ましい子供の空想世界の背後にある恐怖や違和感、現代の観客からは不自然に映る登場人物や周囲の状況について指摘があった。司会（豊原）からは小学校時代に講堂での映画会で本作を鑑賞した思い出が披露された。

『泥の河』（小栗康平、1981年、木村プロ）

無名の新人監督であった小栗康平の実質的監督デビュー作。当時としても珍しいモノクロで撮影されており、大阪下町で生活する人々の姿を、子供の視点から描いている。トークの石塚洋史（近畿大学、日本映像学会会員）は二人の少年、信雄と喜一の埋めようのない分断について、映像的言語法より指摘する。また昭和30年代の安治川河口付近を模すロケ地や宿舟の美術について、当時の資料を元に解説した。司会（橋本）からは、本作公開時の映画界の反響や、キャスト（子役）関係者との偶然の関わりが披露された。

以下プログラムを付け加えて報告とする。

日本映像学会関西支部第45回夏期映画ゼミナール2025年

こども映画特集 一子供向け映画、映画の中の子供たちー

9月5日（金）

午後1:00～開会の辞 大橋勝（大阪芸術大学、日本映像学会会員）

午後1:10～午後1:21 『煙突屋ペロー』（田中喜次）

1936年 21分 童映社

午後1:30～午後2:00 トーク＆ディスカッション：

トーク：王星月（大阪芸術大学大学院芸術制作研究科）
司会進行：大橋勝

午後3:00～午後3:45 『笛吹童子 第一部 どくろの城』（萩原遼）

1954年 45分

午後4:00～午後4:42 『笛吹童子 第二部 妖術の闘争』（萩原遼）

1954年 42分

午後5:00～午後5:53 『笛吹童子 第三部 満月城の凱旋』(萩原遼)

1954年 53分 東映

午後6:00～午後6:30 トーク&ディスカッション

トーク：倉田修二（撮影監督）

司会進行：石塚洋史（近畿大学、日本映像学会会員）

9月6日（土）

午後1:30～午後2:56 『風の中の子供』(清水宏)

1937年 86分 松竹大船

午後3:10～午後3:30 トーク&ディスカッション

トーク：葉口英子（ノートルダム清心女子大学、児童文化研究、日本映像学会会員）

司会進行：中村聰史（日中文化芸術学院、日本映像学会会員）



午後4:30～午後5:48 『白蛇伝』(藪下泰司)

1958年 78分 東映動画

午後6:00～午後6:30 トーク&ディスカッション

トーク：金澤洪充（大阪芸術大学、アニメーション演出家）

司会進行：大橋勝



9月7日（日）

午後1:30～午後2:54 『ノンちゃん雲に乗る』(倉田文人)

1955年 84分 芸研プロ・新東宝

午後3:10～午後3:40 トーク&ディスカッション

トーク：中村聰史

司会進行：豊原正智（大阪芸術大学名誉教授、日本映像学会会員）



午後4:30～午後6:15 『泥の河』(小栗康平)

1981年 105分 木村プロ

午後6:30～午後7:00 トーク&ディスカッション

トーク：石塚洋史

司会進行：橋本英治（日本映像学会会員）

午後7:00～閉会の辞 豊原正智

会場：京都市中京区三条高倉 京都府京都文化博物館



アジア映画研究会

石坂 健治

●公開イベント：「イラン映画を福岡の宝に」(AIFM) プロジェクト～モフセン・マフマルバフ監督『川との対話』特別上映会／Special Screenings: Talking with Rivers by Mohsen Makhmalbaf(第3期第27回(通算第60回))

会期：2025年6月17日(火)～20日(金)(4日間)

会場：アテネ・フランセ文化センター

主催：「イラン映画を福岡の宝に」(AIFM) プロジェクト、アテネ・フランセ文化センター

共催：日本映像学会アジア映画研究会

協力：福岡市総合図書館、コミュニティシネマセンター、映画美学校、株式会社スモールトーク

○上映作品

『あの家は黒い』1962(21分) 監督：フルーク・ファロクザード

『サイクリスト』1989(83分) 監督：モフセン・マフマルバフ

『苦悩のリスト』2023(67分) 監督：ハナ・マフマルバフ

『川との対話』2023(50分) 監督：モフセン・マフマルバフ

○シンポジウム

山口 吉則(「イラン映画を福岡の宝に」(AIFM) プロジェクト代表)

ショーレ・ゴルパリアン(映画プロデューサー、翻訳家)

石坂 健治(日本映像学会アジア映画研究会代表)

○概要

アジアフォーカス・福岡国際映画祭(1991－2020)で上映され、そのうち福岡市総合図書館のフィルムアーカイブに収蔵されたアジア映画は930本にのぼる。そのラインアップを再活用する企画の一環として、とくに収蔵数の多いイラン映画に焦点を絞り、東京などで定期的に上映していく取り組みが「イラン映画を福岡の宝に」(AIFM) プロジェクトである。

2023年に統いて2回目となる今回は、モフセン・マフマルバフ監督ほかの収蔵作品と新作を組み合わせて上映し、当研究会も加わってシンポジウムをおこなった。

4日にわたった日程のなか、混迷する世界に向けて発信した近作『川との対話』を特別上映。これに関連してモフセンの次女ハナ・マフマルバフ監督の最新作『苦悩のリスト』、モフセン監督とアフガニスタンをつなぐ伝説的な劇映画『サイクリスト』、さらにはモフセン監督がイラン映画史上の問題作と評価するドキュメンタリー映画『あの家は黒い』を同監督からのオリジナルメッセージ付きで上映した。

シンポジウムには、同プロジェクト代表の山口吉則氏(福岡ユネスコ協会事務局長)、多くのイラン映画の字幕翻訳者として知られるショーレ・ゴルパリアン氏、司会進行役を兼ねて当研究会の石坂が登壇した。山口氏から福岡に眠るアジア映画をいかに再活用するかについての問題提起がなされ、観客との討議がおこなわれた。ゴルパリアン氏からは、イランを出て英国ロンドンで暮らすマフマルバフ一家の近況(スマホなど軽便な機材での旺盛な制作活動)が報告された。同プロジェクトの東京上映会をさらに継続していくことを前向きに確認してシンポジウムは閉会した。(文責：石坂健治)



●公開イベント：マレーシア映画上映会「わすれな月2025」／Forget-Mak-Not 2025(第3期第28回(通算第61回))

会期：2025年7月27日(日)13時～16時

会場：京都大学稻盛財団記念館 3階大会議室

主催：混成アジア映画研究会

共催：日本映像学会アジア映画研究会

協力：京都大学東南アジア地域研究研究所

○上映作品

『細い目』2005(107分) 監督：ヤスミン・アフマド

○ディスカッション

山本 博之(混成アジア映画研究会代表)

石坂 健治(日本映像学会アジア映画研究会代表)

○概要

京都大学東南アジア地域研究研究所を母体とする混成アジア映画研究会との共催でマレーシア映画『細い目』の上映とディスカッションを開催した。21世紀初頭に巻き起こった「マレーシア新潮」の中心人物として活躍し、51歳の若さで2009年に亡くなったヤスミン・アフマド監督の劇場公開用の長編第一作『細い目』がマレーシアと日本で上映されて20年を迎えた。混成アジア映画研究会が毎年開催している「わすれな月」は、ヤスミン監督の命日の7月25日にちなんで、毎年7月末にヤスミン作品やヤスミン監督ゆかりの作品を観ながらそれぞれの記憶を共有する場である。

当研究会は今回の「わすれな月」に初めて共催し、多言語映画である『細い目』のセリフを言語ごとに色分けした多色字幕付きの実験的な上映とディスカッションを行った。マレー語、中国語、英語が混在するセリフを色分けした独自の日本語字幕は、舞台となっている地域社会の特性を感じ・理解する一助となることが実感できた。山本氏によれば、地域研究者の目から見ると、かねてより映画の字幕は多言語のセリフに対応するには不十分で大雑把なものが多いと感じており、そうした事態を見直す一つのチャレンジとして手作りで色別の字幕を付けてみた由。石坂からは、そうした試みは地域研究的な視点からの映画上映に対する批評でもあり、その意図は十分伝わって成果を上げているのを認めた上で、字幕文字に赤や青の色彩が付くのを煩わしく感じる人もいるかもしれない、むしろ斜体字など多様なフォントや括弧の有無などで区別する手もあるのではないかとの案も提示した。

今回のように具体的な作品を俎上に載せ、映画研究と地域研究のアプローチの異同を突き合わせて議論する場は刺激的で意義があると感じた。今後もぜひ続けていきたい。(文責：石坂健治)



○第3期第29回(通算第62回)例会

日時：2025年8月6日(水)19時～20時30分

会場：Zoomによるオンライン開催

座長：韓 燕麗(東京大学、本学会員)

内容：中国語映画に関する報告2題

- ①報告「中国の無声映画における民族音楽の実践と聴覚的現代性」
報告者：宋 振華(SONG Zhenhua／北京大学芸術学院博士課程、本学会員)
- ②報告『李安の華語映画における視線のポリティクス』(2025年3月刊行)について
報告者：陳 悅(CHEN Yue／中国東南大学芸術学部講師)

今回の研究会は二部構成とし、第一部は宋振華(SONG Zhenhua)による報告「中国の無声映画における民族音楽の実践と聴覚的現代性」であり、第二部は陳悦(CHEN Yue)による自著『李安の華語映画における視線のポリティクス』についての紹介であった。

第一部で発表者の宋振華は、1920年代後期から1930年代初頭にかけて、中国の無声映画は急速に発展し、映画音楽の実践は重要な文化現象となったことを指摘した上で、とりわけ上海の一部の映画館では、外国映画の上映経験を踏まえて、民族音楽を中国産映画と結びつける試みが展開されたという新たな発見について報告した。今後の資料発掘の見通し、そして現在入手した資料の細部に対する読解などについて、発表後に質疑応答が行われた。

第二部の報告者である陳悦は、2025年3月に晃洋書房より出版された『李安の華語映画における視線のポリティクス』の著者である。本書は、台湾出身で華語映画の巨匠である李安(アン・リー)の作品を対象として、ジェンダーとフェミニズムの視点から、映画の中の諸空間に登場する人物の視線のポリティクスを軸に、スクリーンに隠密・提示される欲望や権力関係を検討した上で、映画における視線権力の構造を明らかにしようとする試みであった。発表では本書の内容の一部が紹介された。

(文責：韓 燕麗／かん・えんれい)



◎概要

明治大学大学院教養デザイン研究科との共催で、イランのアニメーション史上初の米アカデミー賞(短編アニメーション賞)受賞作『糸杉の陰で』を上映してトークを行った。

イラン文化を専門とする山岸氏と当研究会の石坂のトークでは、海辺でひっそりと暮らす父と娘、浜辺に打ち上がった巨大な鯨の3者が登場するアニメが描いているものとの背景についての解説が山岸氏からなされた。イラン・イラク戦争(1980-88)に従軍した(らしい)父の記憶がフラッシュバックの空爆のイメージで示され、40年を経てなおあの戦争がイラン国民にとってトラウマになっていることを若い世代の作家たちが表現していることその意義について討議がなされた。

石坂からは、同作の製作母体であるイラン児童青少年知育協会の映画制作部について説明をおこない、1965年設立のこの公立機関がホメイニ革命前の70年代にキアロスタミ『パンと裏通り』などの短編をプロデュースし、革命後に多くの文化機関が再編成を余儀なくされた際もそのまま残って今日まで良作を世に出し続けているという特筆すべき歴史を補足した。聴講者にはイラン人留学生からの発言もあり、充実した討議の時間となった。

(文責：石坂健治)



(いしざか けんじ／アジア映画研究会代表、日本映画大学)

- ◎公開イベント：イラン映画の諸相／アニメーション『糸杉の陰で』を材料に(第3期第30回(通算第63回))

会期：2025年10月4日(土)13時30分～15時

※対面・Zoom同時開催

会場：明治大学和泉キャンパス第一校舎2階208教室

主催：明治大学大学院教養デザイン研究科

共催：日本映像学会アジア映画研究会

◎上映作品

『糸杉の陰で』2023(20分) 監督：ホセイン・モラエミ、シリル・ソハニ

◎トーク「イラン映画の諸相」

講師：石坂 健治(日本映像学会アジア映画研究会代表)

ナビゲーター：山岸 智子(明治大学大学院教養デザイン研究科・政治経済学部教授)

映像アーカイブ研究会

ミツヨ・ワダ・マルシアーノ

【2025年6月21日】についての報告書

広島市による公立フィルム・アーカイブ施設である〈広島市映像文化ライブラリー〉の見学および映像文化専門官・森宗厚子氏（映像学会会員）による講演を伺った。

広島市映像文化ライブラリーは、1982年に日本の地方自治体が初めて設けた公立フィルム・アーカイブである。2026年度の移転計画により現施設は同年10月から休館となるため、今回の見学は本研究会のメンバー及び参加者にとって貴重な機会となった。本映像文化ライブラリーは、旧来型の35mmフィルムによる名作映画コレクションに重きを置いた上映事業を中心とするフィルム・アーカイブであり、また、戦後CIE映画普及の流れを汲んで、文部省[現・文部科学省]が全国地方自治体の図書館に設置を促した社会教育施設〈視聴覚ライブラリー〉の機能も未だに併せ持っているため、16mmフィルムやVHS [Video Home System] の市民団体による上映会向け貸し出し業務も行っている。

森宗氏は2024年に同館に着任する以前、国立映画アーカイブ（2020～24）や川崎市市民ミュージアム（2015～18）にて映画アーカイブにおける上映事業に従事してきた映像アーキビストである。2024年4月より広島に在住されている森宗氏に、広島市映像文化ライブラリーの歴史、地方自治体の映像施設が映画を保存することの意味、また地方であるがゆえの問題点などについて話を伺った。

当日のプログラムは、まず森宗氏に映像アーカイブに関する講演を約1時間半にわたり行って頂き、その後、施設内空間（映写室、ホール、収納庫）の見学を行った。ライブラリーが終了した17:00以降は、近隣の飲食店にて森宗氏の映画上映に携わってきた豊かな経験を背景に、東京フィルメックスやNIPPON CONNECTION等、国際映画祭の運営について、映画館での仕事についてなど、多義にわたる〈映画〉と〈観客〉とを繋ぐ仕事について談話することができた。尚、今回の研究会の参加数は森宗氏を除くと4名であった。非常に有意義な研究会だったため、さらに多くの研究者の参加があれば良かったと痛感した。

研究会後の余談ではあるが、森宗氏が後日〈映画センター〉や〈視聴覚ライブラリー〉に関する文献資料リスト及びリンクをお送り下さり、映像アーカイブを研究する上での新たな道筋を指摘してくれた点に心から感謝する。また、私個人としては、山口市にあるアートセンター、山口ワイカム（山口情報芸術センター YCAM）へ出向き、その取り組みを観察することを森宗氏から強く奨められてことが有り難かった。近いうちに機会を見つけて是非 YCAMを訪ねたいと思っている。尚、広島市映像文化ライブラリーの移転先についての現状での公開情報は下記の通りである。

移転先の新シアターについて

<https://www.city.hiroshima.lg.jp/shisei/machi/1005977/1038913/1043732.html>

移転広報サイト

<https://hiroshima-chuo-toshokan.jp/>

（ミツヨ・ワダ・マルシアーノ／映像アーカイブ研究会代表、京都大学）

映像人類学研究会

田淵 俊彦

映像人類学研究会 第10回報告書

開催概要：

- 日時：2025年8月9日（土）14:00～16:00
- 開催方法：対面（桜美林大学東京ひなたやまキャンパス）およびZoomによるハイブリッド開催
- 申込者数：64名
- 参加者数：45名（対面10名、オンライン35名）

テーマと目的

第10回映像人類学研究会では、現代日本の政治と社会構造に鋭く切り込むドキュメンタリー作品を多数手がける映画監督・大島新氏を招き、対談形式によるセッションを実施した。取り上げた作品は『なぜ君は総理大臣になれないのか』（2020）、『香川1区』（2021）、『国葬の日』（2023）など。いずれも、政治的リアリズムと市民的視点が交錯する社会派ドキュメンタリーとして高い評価を得ている。

今回の研究会では、作品の演出論に加え、大島氏のキャリア形成と制作哲学に迫ることを目的とした。大島氏は、1995年にフジテレビ入社後、ドキュメンタリー番組『NONFIX』『ザ・ノンフィクション』などを担当。1999年に独立し、フリーのディレクターとして活動を開始。2009年には映像制作会社「ネツゲン」を設立し、映画制作に本格的に取り組むようになる。

セッションでは、父・大島渚氏、母・小山明子氏との関係性を含む生育背景にも触れながら、映像制作の履歴、制作における倫理観、取材対象との効果的な距離の取り方、テーマ設定、演出手法などについて、具体的なエピソードを交えて語っていただいた。とりわけ、制作者としての「生の声」を引き出すことができた点は、研究会として大きな成果であった。

ゲストスピーカー略歴：

大島 新（おおしま・あらた）

ドキュメンタリー映画監督・プロデューサー・テレビディレクター

1969年 神奈川県藤沢市生まれ。早稲田大学第一文学部卒業後、1995年にフジテレビ入社。『NONFIX』『ザ・ノンフィクション』などでディレクターを務めた後、1999年に退社しフリーに。以降、『情熱大陸』（MBS）や『課外授業 ようこそ先輩』（NHK）など、数多くのテレビドキュメンタリーを手がける。

2009年に映像制作会社「ネツゲン」を設立。映画監督としては『シアトリカル 唐十郎と劇団唐組の記録』（2007）、『なぜ君は総理大臣になれないのか』（2020）、『香川1区』（2021）、『国葬の日』（2023）などを発表。政治や社会に鋭く切り込む視点と、被写体との距離感に配慮した誠実な映像づくりに定評がある。

2024年より東京工芸大学芸術学部教授。

当日のプログラム：

時間 内容

14:00～ 開会の挨拶・第1～9回研究会の活動報告

14:15～ ゲストスピーカー・大島新氏とのトークセッション（進行：田淵）

15:15～ 参加者との意見交換

16:00 終了

メディア考古学研究会

福島 可奈子

内容と議論の展開：

前半は、司会の田淵による質問形式で進行。テレビメディアおよび映画制作における制約、そしてドキュメンタリーという表現形式の課題について、大島氏の経験と視点から明快な分析が示された。特に「テレビでは描けないものを映画で描く」「ドキュメンタリーは現実を映すが、現実そのものではない」といった言葉が印象的であった。

後半では、取材対象の選定方法、距離感の取り方、テーマの掘り下げ方、演出の工夫など、制作者としての実践的な知見が共有された。「良いドキュメンタリーとは何か」という問い合わせに対して、大島氏は以下のような要素を挙げた。

- ・社会性・普遍性のあるテーマ
- ・オリジナリティのある企画
- ・魅力的な取材対象（良くも悪くも）
- ・深い取材と強烈なシーン
- ・論理性と感情性の両立
- ・虫の眼と鳥の眼の併存
- ・撮影・構成・編集・音の表現の緻密さ
- ・難題への挑戦
- ・視聴者の感情を揺さぶる力
- ・鮮やかなラストと余韻
- ・制作者の執着と長期的関与
- ・観た人に行動変容を促す力

これらの要素は、聴衆の関心を強く引きつけるものであり、学生を含む対面参加者からは「取材対象との信頼関係の築き方」や「政治的テーマを扱う際のリスク管理」など、実践的な質問が多数寄せられた。オンライン参加者からも、大阪大学大学院生による「フィクションとノンフィクションの境界」に関する質問、京都大学大学院生による「編集におけるこだわり」に関する質問などが提起され、さらに深く広がりを持った対話が交わされた。

総論：

第10回研究会は、大島新氏を桜美林大学東京ひなたやまキャンパスに迎え、対面とオンラインのハイブリッド形式で開催された。氏の語りは、制作者としての責任と覚悟に裏打ちされたものであり、映像表現における倫理と美学の両立を追求する姿勢が印象的であった。

また、ドキュメンタリー制作における「問い合わせの立て方」や「語りの構造」に関する議論は、映像人類学の理論的深化にもつながるものであり、今後の研究会の方向性を示唆するものとなった。

今後の課題と取り組み

- ・映像制作との継続的な対話の場を設け、実践と理論の接続を図る
- ・映像人類学の方法論を再検討し、「語り」「記憶」「倫理」などの概念を軸に学際的な議論を展開する
- ・若手研究者・学生の育成を目的としたワークショップや制作実習の導入を検討する

以上

(たぶち としひこ／映像人類学研究会代表、桜美林大学)

メディア考古学研究会は、第4回研究発表会を下記の通り開催した。

開催日時：2025年6月24日（火）17：30～19：00

開催場所：大阪大学中之島芸術センター3階スタジオ

「よみがえる紙フィルム映画——日本の新旧アニメーション夢の競演」

第4回研究発表会では、現在国内外で注目をあつめている1930年代の日本の紙フィルム映画について、そのデジタル化事業に積極的に取り組まれているエリック・フェーデン氏（バックネル大学）をお招きし、ご講演と生演奏つき上映をおこなっていただいた。また山端健志会員とかねひさ和哉会員が、紙フィルムアニメーションの新作『あるけやあるけ』を、当時の「発声映写機」を修復して上映披露した。今回、関西圏ではじめての研究発表会開催となったこともあり、事前にメール、SNS、チラシ、新聞等で積極的に告知をおこなった。その結果、当日は雨にもかかわらず、学会員・一般・学生あわせて50名程度の参加があった。

本研究発表会で取り上げた「紙フィルム映画」とは、日本で1930年代の一時期（1932～38年）だけ登場したホームシアター専用の映画である。メーカーとしては「レフシー」「家庭トーキー」「月星」が知られるが、各社ともフルカラーアニメーションが一番の目玉商品であった。とりわけ「家庭トーキー」は、その名の通り「トーキー」化にも力を入れ、映写機と蓄音機が一体化した独自の「発声映写機」も発売した。当時アメリカでは、1932年にウォルト・ディズニー社がフルカラートーキーアニメーション『花と木』を発表するなど、映画のトーキー化・カラー化が進んでいたが、日本ではセルロイドフィルムでカラーアニメーションを製作するための十分な技術と資金力がまだなかった。そうしたなかで、オフセットやグラビアなど印刷技術を活用する方法で開発されたのが「紙フィルム映画」である。作画や監修には当時著名なアニメーター（大石郁雄、幸内純一など）も関与し、実験的なアニメーション作品を多数生み出した。しかし透過式のセルロイドフィルムとは異なり、不透過の紙フィルムは、反射光で映すため格段に光量が落ち、映画館などで映写には不向きであったため、家庭用の玩具として発売された。

当日は以下のスケジュールで発表をおこなった。

発表1：「特別講義・上映会の趣旨とその歴史的意義」福島可奈子（大阪大学大学院人文学研究科助教／中之島芸術センター兼任教員）

発表2：「デジタルでよみがえる日本の紙フィルムについて」エリック・フェーデン（バックネル大学映画・メディア学部教授）
紙フィルム映画デジタル上映+生演奏（デュオ夢乃：木村伶香能[筝] 玉木光[チェロ]）

発表3：「よみがえった「家庭トーキー發聲映寫器」による新作紙フィルムアニメーションの上映」山端健志（板橋区立教育科学館研究員、武藏野美術大学大学院博士後期課程）、かねひさ和哉（アニメーション作家・アニメーション研究家）

発表1では、報告者が本研究発表会の趣旨と、その歴史的意義について解説した。「紙フィルム映画」とは何かを説明するとともに、発表会副題でもある「日本の新旧アニメーション夢の競演」の意義についても言及した。これまでほとんど一般的に認知されていなかった戦前日本の「紙フィルム映

画」が、現代のデジタル技術でよみがえるという過去から現在へのベクトル（発表2、3）、そしてボーンデジタルによるアニメーションを、戦前の紙フィルム映画の印刷・録音・上映技術でよみがえらせるという、現在から過去へのベクトル（発表4）、この二つのベクトルの交叉するところに、「紙フィルム映画」の新しさ／古さを同時に体感する、歴史的な意義があることを述べた。なぜなら、それは過去の作品—過去の技術、現代の作品—現代の技術のベクトルでは決して体験することができなかった、知られざる「視聴覚」を浮き彫りにするからである。

発表2ではエリック・フェーデン氏が、紙フィルム映画をデジタル化するさいの技術的問題などを中心に発表された。とりわけフェーデン氏の研究チーム「紙フィルム研究プロジェクト（The Japanese Paper Film Project）」は、すでに劣化したオリジナルの紙フィルムをこれ以上傷めずにデジタル化する専用のスキャナー「きょうりんりん」を開発しており、そのスキャナーでの作業工程なども丁寧に解説いただいた。また、ご発表の英語通訳をエリザベス・アームストロング氏が務められた。

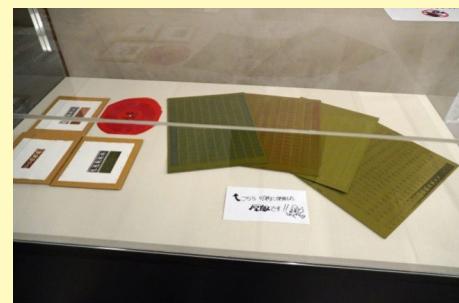


つづいて紙フィルム映画デジタル上映では、厳選した紙フィルム映画（アニメーション、時代劇、ドキュメンタリーなど）を、箏とチェロの生演奏による伴奏付きで鑑賞いただいた。演奏は、これまでアメリカ各地での紙フィルム映画上映会で伴奏をつとめられている、デュオ夢乃の木村伶香能さん（箏）、玉木光さん（チェロ）にご披露いただき、サイレント画面に美しいメロディ世界を創造していただいた。



発表3では、山端健志会員とかねひさ和哉会員が共同で制作した紙フィルムアニメーションの新作『あるけやあるけ』を披露した。本作は、かねひさ会員がデジタルで原画と音源を制作し、山端会員が当時の印刷・録音技法に基づいて、紙のフィルムとSPレコード盤制作をしたもので、山端会員がエンジニアの菊田鉄男氏の協力を得て修復した、当時の「カティトーキー发声映写機」で披露した。この发声映写機は、映写機と蓄音機が一体化した装置である。しかし当時の映写機での上映では大写しにはできず、光量も十分ではないため、広い会場では後方の席から見えづらい問題があった。その

ため、映写されたスクリーンをモニターで拡大してみせる試みもおこなった。それでも当時の装置で上映すると、紙フィルム上に印刷された色彩が十分に発色しないなど、当時の映写環境を追体験によって知ることができた。



（写真提供：大阪大学中之島芸術センター）

紙フィルム映画の総作品数はおそらく数百本に及ぶが、当時子供の玩具として販売されていたため、多くの作品が散逸し失われている。そのため当研究会では、貴重な紙フィルム映画の保存・修復・普及活動につとめるべく、半世紀以上にわたり紙フィルム映画を蒐集してきた松本夏樹会員をはじめ、山端健志会員、佐藤洋会員らが、デジタル保存を試みている「紙フィルム研究プロジェクト（The Japanese Paper Film Project）」への資料提供と共同研究をおこなっており、今回の研究発表会もその研究成果のひとつである。また当研究発表会開催にあたり、柳井イニシアティブ、公益財団法人徳間記念アニメーション文化財団（三鷹の森ジブリ美術館）にもご協賛いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

（ふくしま かなこ／大阪大学）

映像玩具の科学研究会

橋本 典久

第6回 夏の自由研究報告会2025

映像玩具の科学研究会は明治大学中野キャンパスを会場として、夏の自由研究報告会2025を開催した。これまでの研究会のように装置1つを取り上げ、とことん深堀りしようという趣旨ではなく、それぞれが夏の間に取り組んだ自由研究を発表しようという、気軽に参加できる研究会として企画された。

1. 開催概要

- ・日時 2025年9月28日(日) 11:00～17:30
- ・会場 明治大学中野キャンパス高層棟307教室
- ・参加者 26人(発表者13名, 聴講者13名)

2. 進行内容

開会あいさつ / 参加者自己紹介

1. 橋本典久 明治大学: 改良型アノーソスコープとゾートロープの紹介
 2. 古川タク : 新作ゾートロープの紹介
 3. 河内大輔(シカクガング): 偏光板を使った映像玩具の紹介
 4. 石川将也: 書籍「かさねたもようがうござだす!! レイヤーズアクト」、「うご工作エンジン1号」とそのアニメーション装置への応用の紹介
 5. 伊藤隆介 北海道教育大学: 「イメージフォーラム・フェスティバル2025」に出品中のアナログ(っぽい)映像機構の批評作品『まばたく眼』の紹介
 6. 山崎翔太 学習院大学文学部哲学科: レコードプレーヤーのような見た目をしたフェナキスティスコープの図案や立体ゾートロープ再生装置の紹介
 7. 日比谷安希子 横浜市民ギャラリーあざみ野: 横浜市所蔵カメラ・写真コレクションに含まれるエッサネイ・ステレオ・ムービーカメラのプロトタイプについての追加調査報告
 8. 瀧健太郎 ビデオアートセンター東京/東海大学: カメラ・オブスクラ機構を利用した作品"家具の光学"の紹介
 9. 明石穂紀 東京大学: 停止すると見て再生すると見えないという、情報の埋め込まれた動画についての紹介
 10. 江口拓人: 開発途中のスキャニメーションWebアプリの紹介
 11. 鈴木美和: デモ(実物あり)ストロボ効果で静止画が動き出すように見える仕組みについて発表
 12. 松本力: 2001年から継続しているアニメーションワークショップで使用するために自作した映像装置「絵巻物マシーン」と作品「1919-1932-1967-1976-2019」(2019-2020)などを紹介
 13. 岩井俊雄: 2005年にNHK放送技術研究所と開発した「モルフォビジョン」を、安価な小型プロジェクターや3Dプリンターを使って再現した実験装置のデモと、パイロットから発売されている「スピニアニメーター」の紹介
- # 閉会のあいさつ、懇親会
- # 発表者数名ごとに用意されたトークセッションでは、活発な意見交換が行われた。
3. 参加者の感想(抜粋)
- ・豪華メンバーですごい会でした。いくつもの研究テーマ、試したい手法を思いつく、とても刺激になる会でもありました。

・今まで映像玩具をテーマにした集会に参加したことが無かったので新鮮で、衝撃的でした。映像玩具と聞くと『映像の歴史を解説するための教材』というイメージがありますが、そのイメージを吹き飛ばすエネルギーッシュな会でした。映像玩具の特徴として、触る・遊ぶ⇒考える⇒触る・遊ぶ⇒発見する⇒また考える⇒…というように思考と発見を繰り返す工程が一般的な玩具よりも多い気がします。発見したことを話し合って理解を深め、さらに深い探求心へと誘われるような不思議で楽しい時間を過ごすことができました。

・初期映像機器や映像原理というかなり偏った分野にも関わらず、非常に多くの熱のこもった研究発表を聞くことのできる貴重な機会となりました。特に映像が動くことに関して、物理的なメディアとの関係を考える上でいくつもの示唆的な研究が行われていたと感じます。

・非常に有意義な会だと思います。映画、TV、フィルム、ビデオ、デジタルメディア…と、時代の進展に沿って研究ジャンルがタコツボ化する可能性が高い「映像」の世界で、その原点に立ち戻りながらテクノロジーのベースやコンテンツについて考える貴重な機会になっていると思います。

・皆さんの力の入った研究報告に知的好奇心がとても刺激されました。報告内容も、学術研究からのアプローチはもちろん、映像技術をいかに美術史と接続し作品として成立させるか、あるいは映像をいかに哲学的にとらえるかと多様性に富んでいました。興味が重なりながら少しづつ分野の違う方々とのディスカッションはとても有意義でした。

・先人たちの編み出した映像玩具・視覚装置の技術が、現代の感性や知性によって思わぬ進化を遂げようとしているのかも…と思わせる皆さんの日々の制作や探求を垣間見ることができて本当に良かった。制作しているときはかなり孤独なので、実践をしている者同士の経験や知の共有ができたことが嬉しい。

・研究と実践が共存する非常に充実した研究会でした。様々な立場の発表者・聴講者がともに視覚のフロンティアを追求する稀有な会です。発表の場がいただけて大変ありがとうございました。個人的には岩井さんが松本さんへのリスペクトを語る場面がアツかったです・・!

・大変面白い研究会でした。皆さん専門性の高さは言わずもがな、研究者目線というよりは、あくまでも制作者としての興味の延長線上での発表は、実際の制作や授業に繋がりやすいものばかりでした。受け取らせて頂くばかりでなく、何かのカタチを発表したいとも思いました。ありがとうございました。

・この研究会は理工系の研究者の方が多く、いつも大変興味深く刺激を受けております。今度は内容、ソフトというか、見るアニメーションの内容について関心があります。プラトーやレイノーが残したアニメーションは今見てもかなり優れたアニメーションなので、そういう面で、古川さんの新作や岩井さん、松本さんの発表には特に心躍りました。

・今回の作品群は視覚の原理そのものに立ち返らせるものばかりで、私たちが使わざにはいられないデバイスである〈目〉について、あるいは目を通して「見る」とはどういうことか改めて考えさせられました。これだけ多くの実践

者が集まっていること自体が驚きであり、同時に大きな刺激を受けました。発表の後にトークセッションが用意されていたので、作品の背景や考え、さらにその先を直接聞くことができ、単なる発表にとどまらず交流と対話の場になっていたと思います。今後、展示という形式に広げても面白い可能性があるかもと感じました。

・とても楽しい時間を過ごさせていただきました。CGにとどまらず、AIによる画像・動画生成が発達し、「ディスプレイに任意の映像を表示すること」と本来映像や写真が持っていた役割の一つである「事実や現象を伝えること」が乖離しつつある現在、映像の現象としての面白さを探究する本研究会はとても得難いものを感じました。興味関心が近く、それでいて幅広い方が集まっていて、得られるフィードバックもありがたかったですし、とても勇気づけられました。

・もっと手を動かして、やりたいことを突き詰めないとと思いました。これに尽きます。大変貴重な機会を頂きましてありがとうございました。

・私自身デジタルカメラが本格的な撮影機材との出会いであり、また普段ミラーレス一眼を用いて映像制作を行っていることもあり、デジタルカメラは身近なものでした。そのため伊藤さんの「視覚を分け与えられている」という見解には驚きを感じつつ、何故映るか?ということについてもっと疑問に思い、映像を扱う上で知るべきだと痛感しました。映像というメディアそのものの面白さについて改めて考えるとてもよい機会となりました。ありがとうございます。

・映像玩具を軸としながら、メディアアート、アニメーション、デザインに教育、歴史研究などなど、さまざまなアプローチ、視点の交差する研究会でした。工学と詩学がまだ分かれていないプリミティブな映像玩具だからこそ、多様な領域をゆるやかに結びつける媒介となっていることに深く感動しました。

・たくさんの刺激を受けました。みなさまの発表を拝見して、同じ着眼点を皆さんと共有できて楽しい!という感覚と共に、今ならではの技術や工夫で、その人らしさの作品や発表になっていることも興味深かったです。映像玩具(映像原理)の研究は、「枯れた技術の水平思考」という言葉ならぬ「枯れ切った技術の水平思考」だなど改めて実感しました。古川タクさんを筆頭に年齢層も幅広く、何よりも参加メンバーが相互に楽しんで、熱中して盛り上がって、その幸せ感をお裾分けしていただくことができ幸せな時間でした。

・さまざまな点で大変学びの多い、有意義な研究会でした。それぞれの発表が多種多様な側面から、映像とのふれあい方やその物質性、手触りのようなものを探求・提示しているのを目の当たりにし、研究、制作ともにとても大きな刺激を受けました。出自や専門が異なる方々が、おなじ対象や問題をめぐってさかんに意見を交換している熱のこもった会場の雰囲気は、この研究会の持つ射程の広さや奥深さを如実に物語っていたように思います。

・第6回にして、改めて自己紹介のような意味を持つ一日にもなった。同じ分野に興味を抱いていても、各自の研究テーマや制作内容は多岐にわたり、発表のスタイルや手法もそれぞれ個性があり、あつという間の6時間だった。

私は仕事以外で思いや関心をじっくり形にして試行錯誤し、それを発表できる機会はなかなかないため、とても楽しく貴重な経験になった。

・大変充実した会でした。現在の日本でのこの分野におけるベストメンバー集結!だったと思います。現代の幅広い創作手法が俯瞰できたのが面白かったです。この研究会の骨子は、生の視覚体験の面白さの追求にあると思うのでさまざまなデモが、間近で見られることはとても重要だし、200年にわたって色褪せない映像の魅力、これから映像のあり方を考えるうえでこの体験を忘れずにいたいと思います。

・今回も長時間ながら、時間が足りないと思わせるような濃密な会でした。みなさんの研究発表から新しい気付きや学びを得られるこのような場は非常にありがたいと思いました。自身の研究発表については、早いうちに完成させてみなさんにお活用いただけるようにがんばりたいです。

4. 橋本の総括

小中学校の自由研究発表会をイメージして企画しましたが、予想以上に力の入った発表が集まりました。午後のみの予定が丸一日ディスカッションする、熱い会となりました。全国から研究者・アーティストが集まってくださったことに感謝します。

5. 次回予告

第7回映像玩具の科学研究会は、あまり知られていない不思議な映像装置を取り上げ、深堀りや体験を行う予定です。2025年度末ごろを予定しています。





(はしもとのりひさ／映像玩具の科学研究会代表、明治大学）

映像身体論研究会

難波 阿丹

第3回 日本映像学会「映像身体論」研究会「奥まで触れて——映画にみる接触へのクィアな欲望」報告

第3回公開研究会では、金沢大学の久保豊氏から「奥まで触れて——映画にみる接触へのクィアな欲望」と題して、ご講演をいただいた。

はじめに当研究会の代表である難波が、久保豊氏の研究業績について、映画における「接触」の表象分析を通じて、一貫して異性愛規範に対する批評的視座が提示されていると紹介した。第一に、異性愛中心的な社会規範から距離をとる欲望が、映画の中でどのように可視化されるかが問われ、特に、同性間の親密さやホモエロティックな関係性が、視覚や音声を通じて繊細に描かれることで、異性愛を前提とした物語構造に搖さぶりをかけている点を指摘した。第二に、視覚に加えて「触覚的な音声」が重要な役割を果たしていることを提起した。そのさい、雨音や水滴の音、衣擦れなどの音響が、観客の「触覚」の記憶を喚起し、身体的な接触の代替手段として機能しているとする。第三に、異性愛規範を「磁場」として捉え、それを無効化する映画的表現について問い合わせを行った。久保氏の論じるクィア映画には、しばしば同性間の触れ合いや、触れられないことへの欲望が、社会的期待に抗う力として描かれている。最後に、こうした表象を読み解くクィア批評の可能性について議論の道筋を示した。それとは、クィア批評が、既存の世界観を再構築し、異なる親密さや連帯の形を想像する契機となりうる可能性である。映画はその表象作用として、観客に新たな感覚と関係性の可能性を提示しうるのである。

これを受け、久保豊氏の講演では、映画における「接触」の表象を通じて、異性愛規範に対するクィアな欲望や身体的親密さの可能性を探る試みが論じられた。報告は、視覚中心の映画表現において見落とされがちな「触覚」や「接触」の感覚に注目し、それがどのようにクィアな視点から再解釈されうるかを論じた。

まず、久保氏は映画史における異性愛中心的な語りに対する批判的視座としての「クィア・リーディング」を紹介した。これは、意図的であれ無意識であれ、映画に潜むクィアな意味を読み解くことで、異性愛規範を揺るがす戦略的な実践とされる。久保氏は、Vito Russoの『The Celluloid Closet』や『クィア・シネマ・スタディーズ』などの文献を参照しながら、クィア批評が単なる解釈ではなく、視覚的・物語的快楽への欲望に根ざした行為であることを強調した。

久保氏は、コロナ禍における「接触」の意味が問い直されるなか、感染リスクによって身体的接触が制限される一方で、誰かに触れたいという欲望も強くなるという矛盾が生まれたとし、映画がこのような複雑な感情をどのように再現し、観客の身体に働きかけるのかを問うた。ここで「磁場」という概念が導入され、異性愛を前提とした社会規範が人間関係の距離や親密さの形式を規定する力として機能していることを指摘する。久保氏は、具体的な映画作品として、『裸足で鳴らしてみせろ』(2021) や『クセルクセスの王座』(2022)、『青いカフタンの仕立て屋』(2022)などを取りあげた。これらの作品では、視覚や聴覚、触覚が交錯し、直接的な接触が不可能な状況下でも、音や視線、モノを介した間接的な接触がクィアな欲望を表現する手段として機能しているとした。特に「触覚的な音声」や「触感的イメージ」といった概念を通じて、観客の身体的記憶や感覚に訴えかける映画の力が論じられた。そのうえで、「クィア・ファン・アフェクト」の観点から、初期ハリウッド映画における若い女性ファンの身体的な感情や欲望の記録が紹介され、映画がいかにして「ここではない、どこか」への欲望を喚起し、異性愛規範とは異なる親密

さの可能性を提示してきたかを示した。

最後に、久保氏は『裸足で鳴らしてみせろ』を中心に、青年たちの触れ合いが異性愛規範の「磁場」を無効化し、クィアな愛の可能性を開く様子について分析した。その際、久保氏は「触覚」を「距離マイナス」とする伊藤亜紗の議論を援用し、身体的接触が単なる物理的なものではなく、深い欲望の表現であることについて言及した。その後の質疑応答では、映画における接触の表象を通じてクィアな欲望を可視化すること、クィア批評の可能性、また異性愛規範に対する新たな視点など、多岐にわたる論点が提示され、活発な討議が行われた。

第4回 日本映像学会「映像身体論」研究会「映画とファッション—『街燈』における女性の連帯と接触」

本研究会は、近年興隆する「映像身体論」と呼びうる新しい映像解釈の潮流を検討し、従来の美学・芸術学が対象化してこなかった「brain tingles（脳のうずき）」や「head orgasm（頭のオーガズム）」等、映像がもたらす「快／不快」情動、あるいはインター・フェイスの視／触覚的側面について理解を深めることを目的とし、多様な学術分野から代表的な論者を招いて、意見交換を進めていくことを目的としている。

第4回映像身体論研究会では、摂南大学の辰巳知広氏による「映画とファッション—『街燈』における女性の連帯と接触」と題する講演が実施され、映画『街燈』(1957) を題材に、映画におけるファッション表象と女性の身体的・感情的連帯が論じられた。論点の一つは「Haptic Cinema」における接触と親密性の視覚的表現であり、衣装や触れる行為を通じて観客の感覚を喚起する映画の可能性である。次に、映画と観客の双向的コミュニケーションが、視覚だけでなく「触覚」的経験を通じて成立する点も検討されうる。また、難波が辰巳氏の論文では、女性主人公の自立や、洋裁・ファッション・映画館を通じた女性同士の絆が、異性愛中心的な視線からの逸脱として描かれていることについて強調した。さらに、アイリス・マリオン・ヤングの理論を参考し、衣服がもたらす「手触り」「絆」「ファンタジー」の快楽が、女性の身体経験と深く結びついていることを示した。全体として、難波は、映画における「接触」の表象は、女性の主体性や連帯、異性愛規範の攪乱といったフェミニズム的・クィア的視点から再評価されていることについて言及した。

辰巳知広氏による講演では、1957年の日本映画『街燈』(中平康監督)を中心とし、戦後日本映画におけるファッションの表象と女性の身体的・感情的連帯の在り方を、フェミニスト映画理論と現象学的視点から読み解く試みがなされた。講演はまず、1950年代の日本映画におけるファッションの役割に注目する。当時、少女雑誌やファッション誌、洋裁学校、映画などのメディアを通じて、ファッションは女性たちの間で共有され、仲間意識や連帯感を育む手段となっていた。『街燈』もその一例であり、森英恵が衣装デザインを担当した本作では、洋装店を舞台に女性たちの関係性が描かれる。

物語では、洋装店「GIN」を経営する吟子と、同じく洋装店「ナルシス」のオーナーである千鶴子が、男性との関係や社会的困難を乗り越えながら、互いに支え合う姿が描かれる。吟子は、GINが火事に遭ったことを契機に、パトロンや恋人との関係を断ち切り、独立して店を再建する決意を固める。一方、千鶴子も恋愛感情を抱く能瀬との関係において、彼の決断を尊重しつつ、自らの仕事を続ける選択を通じて主体性を示す。こうし

た描写は、異性愛中心主義からの逸脱と、女性の自立を象徴している。

また、作品内では女性同士の身体的・感情的接触が多く描かれ、フェミニズム的視点からの分析が可能となる。たとえば、怪我をした千鶴子を吟子が介抱する場面や、二人でショッピングに出かける場面では、「触覚」を通じた親密さや相互理解が表現されている。男性同士の関係が身体的接触を避けるか、暴力的な接触に限られるのに対し、女性同士の関係は、触れることを通じて信頼や連帯を築いていく。

このような描写は、アイリス・マリオン・ヤングの『On Female Body Experience』における「手触り」「絆」「空想」という三つの快楽の概念と重なる。服の手触りを通じた自己認識、ショッピングや試着を通じた他者との関係性、そして服をまとうことで生まれる物語や幻想が、女性たちの身体的経験として映画に表れている。

さらに、『街燈』におけるファッショントレードは、単なる装飾ではなく、女性の自立や快楽、連帯を象徴する重要な要素として機能している。吟子や千鶴子が身にまとう華やかな衣装は、彼女たちの内面の強さや美意識を視覚的に表現し、ファッショントレードを通じて自己を肯定し、他者とつながる手段となっている。

総じて本講演は、映画におけるファッショントレードの触覚的・感情的側面に注目し、女性の身体経験や連帯の表象を丁寧に読み解くことで、フェミニスト映画理論と現象学的アプローチの交差点に新たな視座を提示するものであった。質疑応答では、『街燈』を通じて、ファッショントレードが女性の主体性と連帯を支える文化的実践であることについて議論が深められた。辰巳氏の仕事は、戦後日本映画における衣裳の意義を再評価する重要な一步となっている。

第5回 日本映像学会「映像身体論」研究会「Y2Kと〈エーテル〉の美学」報告

第5回オンライン研究会では、批評家の北出栄氏による講演「Y2Kと〈エーテル〉の美学」が実施された。講演は、同会の代表である難波からの、セカイ系と呼ばれる作品について扱った北出氏の著書『「世界の終わり」を紡ぐあなたへ』に対する、三つの問題提起への応答から始まった。第一の論点である「接触」と「切なさ」の関係について、北出氏は、これまで自身がセカイ系作品の天空や宇宙などの「遠さ」の表象に注目してきたため、キャラクター同士の「近さ」によって生まれる切なさという視点は新鮮だったと述べた。同会の過去の講演でも議題となった、推し文化における「触れたいのに触れられない」感情はセカイ系の切なさと似ているようで、実際にはプラットフォーム上でユーザーとキャラクターが同じ平面に並べられ、等しく認知資源を提供する労働者として扱われる点で異なる。触れられないもどかしさは、プラットフォームが継続的に燃料を投下するための内燃機関のようなものであり、北出氏はそこから距離を取るための概念として「切なさ」を捉えている。

次に、観客が作品のレイヤー構造の一部として組み込まれているのではないかという指摘に対しては、そもそも現代では「作品」と「観客」を分ける構図が成立しにくいと述べられた。北出氏が提示する「レイヤー」という概念は、むしろアルゴリズムが強制する終わりのない閲覧から身を引きはがすための「意識の中斷」を可能にするものであり、無数に重なりながらも透明で見えない「レイヤー」の存在を意識しつつ、過剰に見透かそうとしない態度を促すものだと説明された。そして、第三の論点で

ある「短い作品の評価」については、短尺動画がプラットフォーム最適化の結果として生まれている以上、「短い」という形式だけで価値を判断することは構造の肯定につながると指摘し、本来は映画も含めた広い生態系の中で、個々の映像表現の特徴を丁寧に見ていく必要があると論じられた。

著書のタイトルに含まれるキーワードの説明では、「世界の終わり」が、作品という単位をどう取り戻すかという問題意識を示す言葉であると北出氏は語る。また「あなた」はセカイ系の想像力を用いて作品を作る作り手のことであり、プラットフォームの無限消費に抗う作品制作や鑑賞のあり方を問うための呼びかけである。「切なさ」は、SNSが余韻を奪う時代において、作品との出会いに留まり続ける感覚を指し、共有や考察へ向かう前の、個人的な体験としての余韻を守るために概念である。そして「編集」は、既存の作品をサンプリングし、レイヤー的に再構築する制作スタイルを意味し、セカイ系の文体とも深く関わっている。

北出氏は、セカイ系を再定義するために、まずその成立背景にあるインフラの変化を押さえる必要があると論じた。2010年代以降、スマートフォンとストリーミングが主流となり、音楽や映像、MV的な非言語的手段によって感覚を共有することが容易になった。北出氏は、この「非言語的なものへの推移」が重要であり、セカイ系という言葉をその変化を読み解く梃子として用いている。また文体の観点から見ても、セカイ系には特有の表現形式が存在する。それは「詩的なモノローグ」と「論理的整合性を欠いたシーン接続」である。セカイ系の文体は、物語の線形性を破壊し、断片をレイヤー的に重ねることで成立している。こうした文体は、セカイ系の美学とも深く結びついている。北出氏はセカイ系の美学を「断片性」と「超越性」という二つの系列で捉えた。断片性は、物語の連続性が破壊され、廃墟のような象徴的イメージとして表れる。一方、超越性は、どこに届くかわからない祈りのような言葉を、大切な誰かに向けて投げかける感覚であり、その象徴は青空である。新海誠『秒速5センチメートル』における、「世界の終わり」の光景をイメージしながら送信されないメールを打ち続ける主人公の姿は、この「破壊」と「祈り」が同時に存在するセカイ系の美学を典型的に示している。

その後の質疑応答では、AIに身体は必要かという問い合わせから議論が始まり、北出氏はAIの特性は身体を持たずに思考らしきものを出力できる点にこそあると述べた。そのうえで、言語には「論理(物語)」と「文体(詩)」の二層があり、身体の代替として重要なのは「論理」ではなく、予測不能な飛躍や癖として現れる「文体」だと強調した。また、光の明滅やネオンといった表象の扱い、リメイク作品における解体・再構築の想像力などが議論され、AIとの対話が既存の人間の秩序とは異なる「別の世界線」を感じ取る契機になりうると締めくくられた。

(なんばあん／映像身体論研究会代表、聖徳大学)

東部支部

西村 安弘

第4回東部支部研究発表会報告

2025年12月20日（土）、東京工芸大学芸術学部1号館2階1206教室にて、第4回東部支部研究発表会を下記のように開催した。8名の発表は、これまでの最多を更新し、朝の10時から夕方の17時までに及ぶ長丁場となったが、発表後の質疑応答も最後まで活発に行われた。

プログラム

- ①10時00分 発表者：白嗣民（東京工芸大学大学院芸術学研究科 研究生）
「時代に取り残されたヤクザ像と作家性の表現 ジャンル映画としての篠田正浩の『乾いた花』（1964）再考」
- ②10時50分 発表者：匡泉森（東京工芸大学大学院芸術学研究科博士後期課程）
「小津安二郎作品における木鉢の音響効果についての考察」
- ③11時40分 発表者：朝倉由香利（日本大学芸術学部研究員）
「映画『山椒大夫』の音楽におけるライトモティーフ表現—Diegetic Leitmotif理論の提起—」
- 昼休み（12時20分～13時00分）
- ④13時00分 発表者：後藤慧（一橋大学大学院言語社会研究科博士課程）
「言葉がもたらす精霊—『ミツバチのささやき』（1973）の認知論—」
- ⑤13時50分 発表者：植田寛（東京情報大学総合情報学部総合情報学科情報デザイン学系メディアデザイン研究室）
「PBL（Problem-Based Learning）による映像制作教育の一考察」
- ⑥14時40分 発表者：竹藤佳世（城西国際大学メディア学部）
「展示映像アーカイブの活用—3面マルチ映像『未来への挑戦～渋沢栄一物語～東京上映会から～』」
- ⑦15時30分 発表者：田淵俊彦（桜美林大学芸術文化学群ビジュアル・アーツ専修）
「民放各局におけるドラマ制作のIP戦略と差別化傾向の分析」
- ⑧16時20分 発表者：森田のり子（東京大学大学院学際情報学府 大学院研究生）
「1930～1950年代日本の「ドキュメンタリー/現実の創造的劇化」の製作実践における作り手の主体形成」

①、④座長：高山隆一

②、③、⑤、⑥座長：西村安弘

⑦、⑧座長：丁智恵

以下は、発表者から新たに寄せられた報告である。

- ①「時代に取り残されたヤクザ像と作家性の表現 ジャンル映画としての篠田正浩の『乾いた花』（1964）再考」

白嗣民（東京工芸大学大学院芸術学研究科 研究生）

『恋の片道切符』（1960）でデビューし、松竹ヌーヴェル・ヴァーグの一翼を担った篠田正浩は、『乾いた花』（1960）を経て、大船調メロドラマへと回帰しつつも、1964年（昭和39年）3月1日、任侠映画を批判的に捉えた『乾いた花』を発表した。「太陽族」を流行語にした石原慎太郎が、

『新潮』（1958年6月号）に「渴いた花」の題名で発表した短編小説が、原作である。無秩序で享楽的な若者ではなく、虚無感を抱えたインテリ・ヤクザを主人公として、原作と同様、物語の約半分を手本引き（賭博）の場面が占めている。

「ジャンルとは、隣接ジャンルとの差異の関係」であるとしたT・トドロフ（『幻想文学序説』）に従いつつ、伊藤彰彦の『仁義なきヤクザ映画史』を参照すれば、ジャンルとしての任侠映画は、明治から敗戦頃までの現代を舞台に、「義理」や「人情」、「男の美学」といった封建道徳を守る主人公が、着流しに刀で殴り込む「セミ時代劇」と捉えることができる。

ジャンルとしての任侠映画には、いくつかの約束事（ジャンル規範）が成立していた。伝統的なヤクザと新興ヤクザが対立する中で、理不尽な暴力に耐え続けた主人公が忍耐の限界に達し、殴り込みをかける。この結末において、仲間は犠牲となるが、主人公は死を免れる。生き残った主人公が刑務所に収監されるのが、定型的結末である。

そうした意味で、『乾いた花』は、任侠映画の結末から始まる。主人公のインテリ・ヤクザの村木（池部良）の視点を通して、彼自身と冴子（加賀まりこ）が共有する虚無が捉えられる。我慢劇から動作劇へと向かう構造をもつ任侠映画では、新興ヤクザとの対立関係を顕在化させる賭博の場面が、文芸映画としての侧面を備えた『乾いた花』では、主人公や冴子の内面的な虚無を埋め合わせる行為として位置づけられる。そのため、賭博の場面は、人物像を造形し、人間関係を描き出す重要な契機として機能する。過去を引きずり続ける村木は、過去に犯した殺人行為を反復する。彼は欲望の対象として冴子を求める主体である。

任侠映画のスターには、「世話物」の二枚目の系譜にある鶴田浩二や、「時代物」の立役の後継である高倉健がいた。こうした任侠映画のスターは、ホモ・ソーシャルな男性社会の物語を展開する一方、女性はその周縁へと排除されていた。しかし、任侠映画の衰退とともに、藤純子が代表的なスターとなり、主人公の座が男性から女性へと移行していく。これまで女性は「性愛的対象」だったのに対し、衰退期に主人公へと昇格した藤純子は、和服に身を包みながら、男性的な立ち居振る舞いを示すことでの象徴的な「男」になる。

その一方、『乾いた花』の冴子は、村木にとって理解も把握もできない「謎の女」として登場する。男性社会への参入を目指した藤純子とは異なり、加賀はあくまで女性的な身振りや態度を保持したまま、男性ヤクザを誘惑する。冴子はホモ・ソーシャルな秩序の内部に同化することなく、その秩序そのものを攪乱する脅威として機能する。賭博を出発点としながら、より危険なものを求め続ける冴子は、世界そのものに倦み、刺激を追い求めるが、その欲望は決して充足されない。閉鎖的なホモ・ソーシャルを前提としながら、『乾いた花』では、「謎の女」である冴子が、その社会を攪乱していく。

今回の発表では、『乾いた花』の分析に終始し、作家論としては十分に展開されなかったので、今後も引き続き、原作との比較などを通じ、研究を深めたい。

参考文献

- 竹中勞『日本映画総断2 異端の映像』、白川書院、1975年。
- 俊藤浩滋、山根貞男『任侠映画伝』、講談社、1999年。
- 関本郁夫『映画監督放浪記』、小学館スクウェア、2023年。
- 平岡正明『歌入り水滸伝』、音楽之友社、1977年。
- 伊藤彰彦『仁義なきヤクザ映画史』文藝春秋、2023年。
- T・トドロフ『幻想文学序説』東京創元社、1999年。

⑥「展示映像アーカイブの活用 —3面マルチ映像『未来への挑戦～渋沢栄一物語～』東京上映会から—」

竹藤佳世（城西国際大学メディア学部）

本発表は、3面マルチ映像作品『未来への挑戦～渋沢栄一物語～』の復元上映での、展示映像アーカイブの活用の実践報告と論考である。『渋沢栄一物語』は、新一万円札の肖像となった渋沢栄一の半生を描いた、16分のドキュメンタリードラマで、1988年開催の'88さいたま博覧会の「渋沢栄一館」で上映された3面マルチ映像作品である。こうした博覧会などの展示映像は、アーカイブが非常に少なく、この作品も当時のフィルムは廃棄されている。

しかし展示映像のアーカイブ活動を行なっている一般社団法人展示映像総合アーカイブセンターが、残されていたビデオテープをデジタル化し、2024年6月に福岡アジア美術館で36年ぶりの復元上映が行われ、2025年1月に城西国際大学紀尾井町キャンパスで、東京上映会が開催された。今回の発表では、主に筆者が関わった東京上映会について触れた。

この上映会の主催は九州大学附属図書館芸術工学図書館、共催は一般社団法人展示映像総合アーカイブセンター、城西国際大学メディア学部竹藤佳世研究室、九州大学大学院芸術工学研究院、後援は日本商工会議所、東京商工会議所である。

上映会では、デジタルデータをPCで制御し、3つのスクリーンと3台のプロジェクターを使用しながら、3面をシンクロさせることで復元上映を行なった。また1日9回の上映の他に、関連作として映画「半身反義」（監督 竹藤佳世 2007年）上映と、監督ティーチインも行われた。これは『渋沢栄一物語』脚本を担当した山岸達児氏のドキュメンタリーである。展示映像は、マルチス画面や大型のスクリーンなどを使用し、従来の「映画」文法とは異なる概念での構成が求められた。映画『東京オリンピック』（1965年）や『日本万国博』（1971年）に携わった山岸氏は、展示映像の脚本のバイオニアでもあり、この映画でもスポーティン国際博（1974年）日本政府館3面マルチ映像『日本・人と自然』が一部引用されている。

こうした展示映像のアーカイブを続けている、展示映像総合アーカイブセンター（代表理事・九州大学名誉教授 脇山真治氏）の活動も紹介しながら、展示映像アーカイブの重要性、そしてその活用について、九州大学附属図書館芸術工学図書館による本編画像・映像の提供を元に発表を行なった。

『未来への挑戦～渋沢栄一物語～』は川北紘一監督（平成ゴジラシリーズ特技監督）、木場勝己氏（映画「ゴールデンカムイ」「室井慎次 敗れざる者/生き続ける者」）主演の時代劇ドラマである。ドラマパートに加え、現在の場所を取材した映像、歴史資料（当時の写真）を交えたマルチ映像で、16分の短尺ながら見応えのある内容となっている。本発表では、3面と1面を使い分けた構成がエンタテイメント性と資料性にどう影響したかを論じた。

展示映像は、その時の社会、時代を反映した貴重な資料であり、一流クリエーターが関わって制作された映像制作の様々な手法のトライアルの記録でもある。今後も教育面での効果を含め、アーカイブの活用について研究を行なっていきたいと考えている。

⑦「民放各局におけるドラマ制作のIP戦略と差別化傾向の分析」

田淵俊彦（桜美林大学 芸術文化学群 ビジュアル・アーツ専修）

本発表では、民放テレビ局におけるドラマ制作が「IP資産」（Intellectual Property : 知的財産）として戦略的に運用される傾向に着目し、各局の制作方針と収益構造の差異を比較・分析した。地上波広告収入の減少と制作費の高騰により、従来のビジネスモデルは揺らぎ、各局はドラマを単なる番組ではなく、映画化、配信、グッズ、イベント、海外展開などを含む多面的な収益源として再定義している。この「IP化」は、放送メディアの収益構造を根本的に変容させ、テレビ局の「商社化」を加速させている。

2024年度（2025年3月期）決算速報によれば、広告収入は依然として主要な収益源だが、減少傾向が続く一方、配信収益は急成長している。日本テレビは若者向けのSNS連動型ドラマや縦型ショート動画を強化し、『プラッシュアップライフ』『放送局占拠』などを展開している。テレビ朝日は『相棒』『仮面ライダー』『ドラえもん』といった長寿IPをABEMA連携で再活性化し、VTuberドラマやアニメ実写化にも進出している。TBSは国際市場を意識した大作志向を強化し、『VIVANT』『フェルマーの料理』などをNetflixと連携して展開している。テレビ東京は製作委員会方式でリスクを分散し、深夜枠を活用したニッチIPを長期運用、『孤独のグルメ』『きのう何食べた?』などで安定収益を確保している。フジテレビはWebtoon原作や海外IPとの共創を進め、FODを強化し、『silent』『いちばんすきな花』などの人気作を展開している。

こうした戦略は国際共同制作やフォーマット輸出の潮流とも結びつき、アジアや欧米との連携が進んでいる。『おっさんずラブ』のタイ版リメイクや台湾との共同開発など、IPのグローバル展開は制作費分担や技術共有を可能にする一方、文化的調整や権利管理の複雑化という課題も伴う。総務省による4K・VFX・AI技術活用支援や国際共同制作補助金は、こうした動きを後押ししている。

発表後には、各局の海外展開の地域別傾向やIP化による語りの変容について質問が寄せられ、国際共同制作の文化的課題や教育的価値の維持をめぐって活発な議論が行われた。

本研究の結論として、IP戦略は収益構造を支える重要な要素であるが、公共性や物語の深度を担保する再構築が不可欠である。収益化の圧力が強まるほど、作品は市場価値を優先し、語りの余白や批評性を犠牲にする危険がある。今後は、クリエイターの創造性を守る制度設計、教育的価値を持つコンテンツ開発、視聴者リテラシーの向上が求められる。さらに、IP戦略が視聴者の文化的リテラシーに与える影響を定量的に検証し、国際共同制作における権利管理や文化調整の実態を比較研究すること、AIやデータ分析を活用した制作効率化がクリエイティブの自由度に与える影響を評価し、持続可能な制作モデルを設計することが今後の課題である。地上波が「IPの起点」として再定義される時代に、公共性と創造性を両立させる方策を探ることが、次世代の映像研究における重要なテーマとなる。

⑧「1930～1950年代日本の「ドキュメンタリー／現実の創造的劇化」の製作実践における作り手の主体形成」

森田のり子（東京大学大学院学際情報学府 大学院研究生）

中部支部

齋藤 正和

発表者はこれまでの研究で、日本のノンフィクション映像分野の作り手らが1930年代にイギリスの映画運動から取り入れた「ドキュメンタリー」および「現実の創造的劇化」という概念を左翼思想に基づく製作方法として捉え、戦時体制が強化されていくなかでもその実践を重ねていったことに着目してきた。これを踏まえて、本発表ではそうした製作実践において作り手らがいかなる主体形成を試みていたのかという問題を論じた。

従来、戦時期および占領期のプロパガンダ政策に追随した作り手らに対しては、戦後に台頭した若手らが戦争責任と政治イデオロギーの両面でその「主体性」の欠如を厳しく批判したことで知られてきた。それは歴史的必然性を伴う展開であったが、一方で戦時期から戦後初期にかけての「ドキュメンタリー／現実の創造的劇化」をめぐる作り手らの主体的な模索が看過されていく傾向も生じた。この点を再考するため、戦後初期の文化芸術分野における「主体性」論争、とくにノンフィクション映像分野の「作家主体」に関する議論を概観した上で、1930～1950年代の作り手らの「主体性」のあり方が1960年代以降に定着した芸術主義的な「作家主体」とは異なる前提に立っていたのではないかという仮説を提示した。

具体的な議論としては、映画の作り手=さまざまな社会的役割を担う文化実践者という視座を用いて、戦時期の活動との連続性がみられる戦後初期の労働組合映画協議会(労映)における厚木たかの製作実践を取り上げた。労映では映画製作スタッフも労組の一員として連帯することを試みており、全国繊維労働組合の発案による『少女たちの発言』(1948)で脚本を手がけた厚木も、戦時期と通底する方法論を用いる一方で、他分野の労組員と協働して脚本を修正するなど「芸術家」以上に「労働者」としてのアイデンティティを重視していたという点について検討した。

発表後の質疑応答では、現代の映像製作に照らし合わせる意義や厚木のフェミニストとしての主体形成といった貴重な論点をご指摘いただいた。本発表の内容は、日本のノンフィクション映像分野における戦前・戦後世代のいざれか一方を称揚するのではなく両者の関係性を歴史的に捉え直すものとして、また同時にオーソドックスな作家論の再考という近年の潮流にも寄与するものとして進展させていきたい。

(にしむら やすひろ／東部支部代表、東京工芸大学)

中部支部では、2025年9月5日に名古屋芸術大学において、中部支部第1回研究会および中部支部総会を以下の内容で開催する予定であったが、台風接近に伴う荒天のため、前日に中止となった。

なお、予定していた研究発表2件については、第2回研究会にて実施していただくこととなった。

2025年度 | 日本映像学会 中部支部 | 第1回研究会

日時：2025年9月5日（金）13:30より

会場：名古屋芸術大学内 西キャンパス B棟2階 大講義室

◎招待講演

コミックコンテンツの趨勢 日韓のマンガ・ウェブトゥーン交流を通じて
ナカノケン氏

◎研究発表（2件）

映画制作の教育手法に関する実践的研究

鈴木 清重 | 愛知淑徳大学

SNSアプリにおける「ホームタブ」のUI設計の考察—再帰的な自己形成を支える「家」としてのSNS

林亮太 | 名古屋学芸大学 メディア造形学部 映像メディア学科 助手

中部支部では、2025年12月14日に、中部支部第2回研究会および中部支部総会をオンラインにて開催した。

中部支部第2回研究会では、2件の研究発表および1件の招待講演が行われた。

研究会終了後には中部支部総会を開催し、2024年度の活動報告ならびに支部予算に関する会計報告を行った。また、2025年度の事業計画案について確認を行い、承認を得た。

2025年度 | 日本映像学会 中部支部 | 第2回研究会

日時：2025年12月14日（日）13:30開始

会場：オンライン（Zoom）

担当校：情報科学芸術大学院大学

◎招待講演

『想像力喚起の実践—認知作用型AIインタラクティブアートの制作から』
スコット・アレン（Scott Allen） | アーティスト 像楽家／生像作家 京都精華大学メディア表現学部専任講師

要旨：

認知作用型AIインタラクティブアートとは、鑑賞者の行為に応答してAIを用いた推論がリアルタイムに実行され、その結果が鑑賞者の認知プロセスに作用する形式を指す。本講演で紹介する筆者の作品、影をAIが「見立てる」《Unreal Pareidolia -shadows-》、顔から生成される景色を俯瞰する《Simulated Scenery -clouds-》、見知らぬ自分が映像に登場する《Ambiguous Boundaries -windows-》などでは、AIの出力それ自体ではなく、鑑賞者個々の知覚や想像力に及ぼす認知的効果が作品の本質を成す。生成AIによる創作物の均質化が進む中、技術を認知的効果を生むための

装置として位置づけることで、個別的で多様な想像力喚起の可能性を、制作実践を通じて論じる。

略歴:

2016年情報科学芸術大学院大学(IAMAS)修了。人の想像力と視覚装置やテクノロジーの関係に着目し、投影装置の仕組みに物理的に介入し変調したり、日用品に手を加えることで像を作るスタイルでインスタレーション制作・パフォーマンス活動を行なう。また、深層学習を用いた作品制作やAIと協奏するライブコーディングユニットAi.stepとしてもライブ活動を行なう。主な受賞に、CVPR 2024 AI ART GALLERY Best works award、やまなしメディア芸術アワード2021優秀賞受賞など。近年参加の国際フェスティバルに「FILE 2025」(Foyer | Fiesp Cultural Center, Sao Paulo, Brazil)、「MUTEK Montréal Édition 21」(ONLINE Platform, Canada)などがある。

<https://scottallen.ws/>

◎研究発表(2件)

映画制作の教育手法に関する実践的研究

鈴木 清重 | 愛知淑徳大学

要旨:

種々の携帯端末が普及した現在、「誰でも映画が撮れる時代」といわれる。しかし、単発的に消費されやすい動画が普及した一方で、年間に制作される作品に占める映画(劇場鑑賞可能な映像)としての作品の割合は減少している可能性がある。

本研究では、現代の映像技術(テクノロジー)水準下で、映画を制作するために必要な技能(スキル)、技法(アート)を検討する。大学等での教育プログラムの実践を紹介しながら、映像教育の課題を考察する。

SNSアプリにおける「ホームタブ」のUI設計の考察—再帰的な自己形成を支える「家」としてのSNS

林 亮太 | 名古屋学芸大学 メディア造形学部 映像メディア学科 助手

要旨:

本発表は、SNSアプリにおける「ホームタブ」の設計に着目し、ユーザーの行動様式や自己認識に与える影響を考察する。かつて「ネットサーフィン」として語られた漂流的な閲覧体験とは異なり、SNSでは、ユーザーごとに最適化された「ホーム」へ逐一回帰する構造を前提としている。このようなインターフェース環境が、投稿や閲覧を通じて自己像や他者関係を再帰的に調整・管理する、若者に顕著な実践に関与している可能性を論じる。

鈴木会員の発表では、映画制作教育を対象に、技術・技能・技法の三要素を「映像環境」として捉え、レヴィンやヘルソンなどの心理学的知見を背景に、教育実践に関する考察が行われた。ストップモーションやコンティニュイティ編集などの授業事例を通じて、未完了性や遮蔽が知覚や編集に果たす役割が示され、映像制作が専門教育にとどまらず、メディアリテラシー教育としても意義を有することが示唆された。

林氏の発表では、SNSアプリにおける「ホームタブ」のUIが若者の自己形成に与える影響について、メディア論的観点から考察が行われた。ユーザーの無意識的な体験に焦点を当て、アルゴリズムによる最適化、私的空间性、体験の起点といったホームタブの特性が、再帰的な自己形成を支える「家」として機能している可能性が示された。さらに、TikTokを自動操作し、アルゴリズムが異質な「家」を構築する過程を可視化する自作についても紹介された。

招待講演ではまず、AIの利点は「人間が曖昧に行っていることを数理的に扱える点」にあると位置づけられ、人間の認知的判断を確率として処理するという視点が共有された。続いて、「認知×AI×インタラクティブアート」という組み合わせにより、従来のインタラクティブアートが陥りやすい予定調和や、生成AIにおける均質化の傾向を乗り越える制作の可能性が示された。

実践例として、自作《Unreal Pareidolia -shadows-》が紹介され、AIを人間の想像力を拡張する装置と捉え、「見立て」をキーワードとする試みが提示された。質疑応答では、AIに対する批評的態度の変遷に加え、同作において影から画像、さらに言葉へと変換される過程で生成されるキャプションの語順や主語の違いが、想像力に与える影響について議論が行われた。そのほか、「見立て」における文化的な差異など、多様な観点から質問が寄せられ、活発な意見交換が行われた。

(さいとう まさかず／中部支部代表、名古屋学芸大学)

関西支部

大橋 勝

2025年7月5日(土) 関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスにて日本映像学会関西支部第103回研究会が開催され、2件の研究発表が行われた。

○トリュフォー映画における偶発性 関西学院大学 安部孝典会員

○伊藤高志の映画におけるカオスと秩序 一空間とリズムをめぐって一空四天王寺大学 松井浩子会員

安部会員の発表は、『大人は判ってくれない』(1959)における主人公アントワーヌ少年のインタビュー・シーンを主たる手がかりに、フランソワ・トリュフォー監督の作家性と特徴を分析するものであった。この撮影において、監督自身がアントワーヌ役のジャン=ピエール・レオーに対して直接インタビューをし、後に精神科の女医が質問しているように声を吹き替えている。レオーの返答は役柄と自分自身を混同している箇所があるが、これは矢継ぎ早で即興的な質問による。またこのシチュエーションは監督自身が少年鑑別所で受けっていた女性カウンセラーによる面談を反映しており、この映画にトリュフォー自伝的要素があることが示唆される。

西部支部

趙 瑞

トリュフォーは子どもの内面に大きな関心を持っており、カメラで捉えられた子どもの反応の瑞々しさを重要視し、準備された物語よりも人物の描写を優先することがある。そこにはジャン・ルノワール映画のおおらかさの影響もある。発表者は恣意的な突発性を積極的に呼び込み、偶発性をありのまま取り入れる姿勢にトリュフォー独自の特異な作家性が認められると結論づける。

松井会員の発表は、アンリ・マルディネのリズムの空間論を理論的枠組みに、伊藤高志の実験映画作品、特に最新作『遠い声』(2024)を分析するものであった。初期代表作『SPACY』(1981)では、写真のコマ撮りによる特異な技法で、何もない空虚な体育館の中をカメラの視点だけが縦横無尽に移動する。発表者はこれについて、マルディネの言うカオスの空間、永遠に到達しないさまよいが視覚化されていると指摘する。一方『遠い声』は無言の劇映画とでも言うべき形式で、若い女性（黒）がカメラを手に彷徨する。黒い女は撮影しながら当て所なく非座標的な風景空間をさまよう。主人公の分身たる白い女が立ち現れるが、同一空間にいながら二人は決して出会うことはない。

ふたつの作品は一見全く異なるスタイルであるが、映画というメディアを通して世界との関わりを探求し、目的地のない空間をさまよう作者自身の旅としてつながっており、同時にこの旅にリズムを刻む拍として表出していると発表者結論づける。

フランス・ヌーヴェルヴァーグと日本の実験映画とジャンルは異なるが、いずれの発表も映画作家の本質に迫る刺激的な研究発表であった。質疑応答も活発に交わされ、今後の研究に資する有意義な議論を行うことができた。

（おおはしまさる／関西支部、大阪芸術大学）

西部支部では、2025年9月13日（土）に2025年度西部支部研究例会および支部総会を九州産業大学芸術学部にて開催した。

本研究例会では、1件の研究発表が行われた。

研究会終了後、同会場にて2025年度西部支部総会を開催し、今年度の活動報告を行った。

<2025年度 西部支部研究例会概要>

- ・日時：2025年9月13日（日）15:00開始
- ・会場：九州産業大学芸術学部17号館6階 デジタルラボ601

◎口頭発表（1件）

- ・西谷郁（福岡インディペンデント映画祭国際担当）

発表タイトル：

観光行動と短編制作：映画祭のサスティナビリティ

要旨：

COVIT-19以降、安価で手軽に短編映画を制作しオンライン上で交流する機会が飛躍的に増えたことをうけ、映画祭の持続性を高めるために、映像クリエイターを観光案内（ロケハン）し、現地で短編映画を制作させて、次の映画祭で上映する、という循環型のプロジェクトが増えている。それは新たな人材を育成し交流するという多くの映画祭が掲げる開催意義にも合致し、一過性ではなく継続的に映画祭に参加してもらえるような試みである。本報告では韓国のブサン・インターナショナル映画祭におけるレジデンシープロジェクトの事例を中心にその特徴を考察する。

発表後には参加者間で活発な意見交換が行われ、韓国のインディペンデント映像制作の現状について、より多面かつ深い理解を得る機会となつた。大変有意義な時間であった。

（ちょうるい／西部支部代表、九州産業大学）



日本映像学会第 52 回全国大会 第二通信

大会実行委員会

I. 大会概要

1. 会場：愛知淑徳大学長久手キャンパス
2. 会期：2026年5月30日(土)、31日(日)
3. 大会テーマ：「名古屋国際ビエンナーレARTECの記録からアート&テクノロジーの現在地を問う——artport、MEDIA SELECTを経て」(仮)
4. 大会プログラム(予定)

2026年5月30日(土)

- ・開会
- ・シンポジウム
- ・研究発表
- ・作品発表
- ・懇親会

2026年5月31日(日)

- ・研究発表
- ・作品発表
- ・理事会
- ・第53回通常総会
- ・閉会

※大会プログラムの詳細については、大会ウェブサイトおよび「第三通信」(2026年5月初旬発行予定)でお知らせいたします。

5. 大会参加費

- ・会員 3,000円
- ・一般 2,000円
- ・一般学生 / 学生会員 1,000円

(上記参加費で両日とも参加可能)

6. 大会参加を希望される方は、大会ウェブサイトの「大会申込」フォームより申し込みください。大会参加の申し込み期限は、[2026年5月8日\(金\)](#)です。

II. 研究発表 / 作品発表 申込要領

1. 研究発表 / 作品発表の申込資格

2025 年度在籍会員(会費未納・滞納者は除く)

2. 研究発表 / 作品発表の申込方法・期限

- ・大会ウェブサイトの「発表申込フォーム」より申し込み下さい。申し込み後、受領確認の自動メールを差し上げますが、メールが届かない場合は必ず問い合わせ下さい。
- ・「発表申込フォーム」の送信には、発表概要等を記述する、指定のファイル(Microsoft Word形式)が必要です。このファイルは大会ホームページからダウンロードできます。
- ・大会ホームページからダウンロードされた指定のファイル(Microsoft Word形式)以外の申込みは受け付けません。
- ・必要事項に不備のある場合や、申込資格のない場合は無効となります。
- ・発表概要の字数は、800字以上1,000字以下です。また図表/図版/画像等を挿入する場合は、600字以上800字以下となります。
- ・上記の申込によって提出された「発表テーマ」や「内容」については、下記「II-3 発表申込の審査」のとおり、厳正な審査と理事会の審議を経て、大会実行委員会が正式に受理した後に、原則として概要集にそのまま掲載されます。それらを前提に原稿を作成して下さい。
- ・画像等に著作権が関わる場合は、必ず許諾を受けてください。また、引用元などの明記に関してもご注意ください。
- ・なお、日本映像学会の既存の研究会は、大会の研究発表 / 作品発表を

申請することはできません。各研究会活動は大会以外の活動の中で行ってください。

- ・申し込みが多い場合には、理事会によって抽選となる場合があります。
- ・同一大会において、同一人物による複数エントリーは認められません(単独エントリーと共同エントリーの複数エントリーも不可)。
- ・発表の申込期限は、[2026年2月13日\(金\)](#)とします。

3. 発表申込の審査

- ・上記 II-2 に従って申し込みされた発表は、日本映像学会理事会(2026年3月22日開催予定)において厳正な審査を行い、承認を得た後に、大会実行委員会が正式に受理いたします。
- ・受理に関しては、申込対象者に別途お知らせする所定の期日までに、
 ①入会手続きや会費納入を完了する。
 ②理事会の所見をふまえた概要の再提出をする。
 のような(条件付き)受理も含みます。条件を満たさない場合、受理は取り消しとなります。
- ・また、下記の注意事項にも留意してください。
 - 必要事項に不備のある場合は、無効となることがあります。
 - 発表内容やテーマが、学会の趣旨にそぐわない場合や、技術的な理由で対応できかねる場合は、ご相談の上お断りすることがあります。
 - 日本語の形式も審査の対象になります。
 - 提出された発表のタイトルおよび内容を、申込受理後に変更することは原則としてできません。

III. 研究発表 / 作品発表について

1. 発表時間

- ・研究発表 / 作品発表の時間は25分、質疑応答は5分です。

2. 使用機材

- ・研究発表 / 作品発表にあたっては、持参したノートブックコンピュータから、発表会場のプロジェクター / スピーカーへの接続が可能です。
- ・会場のプロジェクター / スピーカーへの接続には、HDMI端子が利用可能です。
- ・映像 / 音声の出力に変換コネクター等が必要な場合は、各自持参してください。(Macで発表される方は、変換コネクタを持参ください)
- ・映像の出力解像度は1080p30(FPS)まで、音声はステレオ再生が可能です。
- ・発表において、会場に備え付けられた機材以外を希望される場合は、原則として発表者にご用意いただきます。

発表会場の設備機器

- プロジェクター(天井) / スクリーン
- アンプ / スピーカー(天井)
- マイク(有線 / 無線)
- 映像 / 音声入力パネル (HDMI)
- ・発表形式や方法について、個別のケースがある場合には事務局までご相談ください。
- ・配布物がある場合には、各自ご用意ください。

3. 発表言語

- ・発表は原則として日本語でお願いします。ただし、実行委員会の裁量により他言語での発表を認める場合があります。

編集後記

総務委員会 常石 史子

IV. 会場へのアクセス

大会会場へのアクセスは、下記リンクをご参照ください。

- ・愛知淑徳大学長久手キャンパス(大学HP)

[交通アクセス]

https://www.aasa.ac.jp/guidance/campus_guide/map.html

[キャンパスマップ]

https://www.aasa.ac.jp/guidance/campus_guide/nagakute.html

会場：愛知淑徳大学長久手キャンパス

(〒480-1197 愛知県長久手市片平二丁目9)

日本映像学会第52回全国大会実行委員

委員長 村上 泰介(愛知淑徳大学)
副委員長 斎藤 正和(名古屋学芸大学)
委員 青山 太郎(名古屋文理大学)
委員 小川 順子(中部大学)
委員 伏木 啓(名古屋学芸大学)
委員 村上 将城(名古屋学芸大学)
委員 森田 明日香(愛知淑徳大学)

以上

(むらかみ たいすけ／日本映像学会第52回全国大会実行委員長、
愛知淑徳大学)

実行委員会事務局は以下の住所です。

〒480-1197 愛知県長久手市片平二丁目9

愛知淑徳大学創造表現学部 村上泰介宛

(＝日本映像学会第52回全国大会事務局)

大会ウェブサイト：<http://jasias.jp/eizo2026>

メールアドレス：aasa-convention52@jasias.jp

会報205号をお届けいたします。今号は学会組織活動報告を中心とする号で、研究企画、機関誌編集の各委員会のほか、九つの研究会と四つの支部、そして関西支部による夏期映画ゼミナールより報告が寄せられました。いずれも各組織の充実した活動の様子を伝えていますが、本学会が包摂する活動の幅の広さをつくづくと実感させるものもありました。

冒頭の「VIEW展望」欄は入江良郎会員にお願いしました。氏は国立映画アーカイブ副館長の要職にありながらも、そのかたわらであくまで一研究者として、草創期の日本映画史に関する綿密な研究を長年粘り強く続けておられます。『映像学』111号(2024年2月)掲載論文「映画渡来史再考——吉澤系シネマトグラフの正体は何か」は、日本映画史の突端を探る実証研究を、謎解きミステリーさながらに展開された刺激的なものでした。本コラムでは、そうした入江氏ご自身の研究態度とも密接に関わると思われる、塚田嘉信の日本映画史研究について論じてくださいました。「まだ明らかになっていないこと」をごまかさないことで、わからなかつたことはわからなかつたこととして明示して、後に続く者に引き継ぐこと。私自身、映画史研究をおこなう者の一人として、わからないことの多さに途方に暮れることができますが、そんなときほど体裁のよい筋をつくることに流れてしまわぬよう、肝に銘じなければならないと強く感じたところです。

愛知淑徳大学で開催される第52回全国大会の準備も着々と進んでいく様子です。研究発表および作品発表の申し込み締め切りは2月13日とのことで、今回多くの方が発表を予定されていることだと思います。多くの会員の皆さまのご参加により、今回も充実した大会となりますことを祈っております。大会実行委員長の村上泰介先生をはじめ、委員および関係者の皆さま、引きつづきどうぞよろしくお願い申し上げます。

(つねいし ふみこ／総務委員会、獨協大学)